
Baseball is my life. ~野球が好きで、野球に涙した人~

地球の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Baseball is my life - 野球が好きで、

野球に涙した人へ

【Zコード】

N2407M

【作者名】

地球の星

【あらすじ】

野球好きな青年「日野竜次」はある企業に勤める一人の社会人として過ごしていた。彼は中学生時代、野球部に所属していた。しかし中学2年生の終わり頃から故障に悩まされるようになつた。そんな中でも彼は一生懸命部活動を続けた。その結果、彼の身に起つたことは…。現在、彼はどの野球クラブにも所属しないまま、会社のソフトボール大会に参加したり、バッティングセンターに行ったりしながら野球を楽しんでいた。

社会人編1：会社のソフトボール大会

ある晴れた日曜日、会社のグラウンドで部署対抗ソフトボール大会が行われた。

その大会は8つの部署によるトーナメント戦で、男女混合チーム参加OK。女子がスタメンに1人入ると自動的にそのチームに1点が入った状態から試合開始となっていた。

ルールはピッチャーの暴投による進塁はなし、盗塁なし、フォアボールなし、デッドボールあり（以上、男女共通）。女子がバッターボックスに立っている時には三振なし。

試合は5回までで、1時間を経過すると新しいイニングには入らない（仮に4回の途中で1時間を経過するとその回で終了。）というものであった。

野球が大好きな会社員、日野竜次は、この日、バイオ部チームの一員としてソフトボールに参加していた。

彼は中学時代には野球部に所属し元々外野手をしていたこと、チームの中でただ1人の左打ちであることを買われて試合では1番ライトで出場した。

（注：彼は右投左打。それ以外のメンバーは全員右投右打です。）午後1時、バイオ部チーム（3塁側）と部品検査部チーム（1塁側）の試合はバイオ部チームの先攻で始まった。

両チームの選手達はあいさつのために整列した。
ホームベースの付近には試合のないチームのメンバーから4人が審判として並んでいた。

その中で主審をつとめる一人がルール説明を始めた。

「これよりバイオ部チーム対部品検査部チームの試合を開始します。なお、バイオ部は女子が1人、部品検査部は2人出場するため、1対2から試合を開始します。それでは、礼！」

主審がそう言つと双方のチームの選手達は一斉に頭を下げながら
「お願いします！」
と言つた。

そして部品検査部チームの選手達は一斉に守備に散らばつていった。

バイオ部チームの先頭バッター、竜次はあいさつが済むとヘルメットをかぶり、ソフトボール用の金属バットを持って、バッターボックスの脇に立ち、投球練習をしているピッチャーのボールに合わせて素振りをし始めた。

そして投球練習が終わると、彼は左バッター・ボックスに立ち、ヘルメットを取つて審判に向かつて頭を下げながら

「お願いします。」
と言つた。

審判は竜次がバットを構えたのを見て「プレイ！」とホールした。
相手ピッチャーは緊張したような表情で1球目を投げた。

判定はボール。

続く2球目もボール。3球目は様子を見るようにして見逃しストライク。

4球目はボール。5球目もボールだつた。

これでボールが4つになつたがルールにより1塁に行くことは出来ず、竜次はこのままバッター・ボックスに立ち続けた。

「うーん、左（打者）は投げづらいな。」

相手のピッチャーは独り言のように言つた。

（それならこつちはチャンス！）

竜次はそう思い、ますます打ちたい気持ちになつた。

「ピッチびびつてゐぞ！」

「いけりいける——！」

3塁側ベンチからは次々と声援が飛んだ。

なかなかストライクが入らない状況だつたがフォアボールが採用されないため、打つしかない竜次は次から打てる球を積極的に打つ

ことにした。

そして6球目。彼はインコースのボール球に手を出してしまい、バットの根元にボールが当たってしまった。

結果はファーストへの平凡なフライだった。
試合が始まつたばかりでコントロールが定まらないピッチャーやプレッシャーをかけたいところだったが、ルールに阻まれた形になつた。

相手ピッチャーやは自信を取り戻したのか、それとも右打者のためか、次のバッターからストライクが入るようになった。

その回は2アウト後、ヒットでランナーが一人出たものの無得点に終わった。

竜次の第2打席は3回表2アウトランナーなしの場面でまわってきた。この時点でスコアは1対2のままだつた。

「日野！ 今度は打てよ——！！」

「元野球部の意地見せろ——！！」

ベンチからは1打席よりも大きな声援が飛んだ。
「お願いします。」

竜次は1打席目と同様にあいさつをすると、また左打席に入った。彼は1球目を見逃してストライク、2球目ボール、3球目を空振りした後、4球目をレフト前にゴロでヒットを打つた。

とりあえず元野球部の面目を保つた竜次は1塁ベース上で小さくガツツポーズをした。

その後は竜次の仕事仲間で、一緒にバッティングセンターに行く仲もある2番の三鷹が左中間に大きめのヒットを打つた。

竜次は好走塁を見せて1塁から一気にホームインし、2対2の同点に追いついた。

(正確には試合開始時点についていたハンデを取り返した。)

「日野！ ナイスラ——ン！」

2塁ベース上で三鷹は叫んだ。

ホームインした竜次は右手を突き上げながら応えた。

彼はベンチに戻ると他の選手達とハイタッチをかわした。

この回は結局この1点で攻撃を終了した。

しかし、バイオ部チームの紅一点であり、ピッチャーでもある立川たちがその裏、相手に集中打を浴び、さらにはファーストを守つてい
る三鷹のエラーもからんで一挙5失点。3回終了時点で2対7とな
つてしまつた。

4回表、バイオ部チームはヒットと相手のエラーで2アウトなが
ら満塁のチャンスを作つた。

ここで迎えたのは9番ピッチャーの立川たちだった。

「打ってくれー！」

「頼むぞーーー！」

「日野に回せー！」

ベンチからは大きな声援が送られた。

一方で彼女は大きなプレッシャーをかけられたような表情で右打
席に向かつていつた。

次のバッターである竜次はウェイティングサークルで、必死に自
分まで出番が回つてくることを願つていた。
(何とか僕に回してくれ。頼む。)

しかし、立川は空振りを3回繰り返した。

本来なら三振なのだが女子は三振免除というハンデがあるため、
彼女はバットにボールが当たるまで何回もバットを振り続けた。
そして6球目。やつとバットにボールが当たつた。
しかしピッチャーゴロに倒れてしまい、結局この回は0点で終わ
つてしまつた。

立川は少し走つただけで1塁まで到達せずに戻つてきて、竜次の
ところに来た。

「…ごめんなさい。」

彼女は申し訳なさそうに謝つた。彼女にもどうしても竜次に回し

たいという気持ちがあつたのだろう。

「いいよいよ。それより、切り替えていこひ。」

竜次はそう言ひとライトのポジションに向かつて走り出していく
た。

そして最終回である5回表、相手チームはピッチャーを交代して
きた。この時点でスコアは8対2で部品検査部チームがリードをし
ていた。

とにかく点を取るしかないというだけあって、先頭で打席に入っ
た竜次はこれまで以上に気合を入れていた。

「日野ー！まずは墨に出ろー！」

「かつとばせー！」

ベンチから次々と声がかかる中で、相手ピッチャーが1球目を投
げた。

山なりの遅い球だつたが、竜次は思い切りバットを振りぬいた。
カキーーーン！！

打球はライト方向にあがつた。ライトは必死にバックをした。
(頼む。抜けてくれ。)

竜次は走りながらそう思つた。

打球は予想以上に伸び、ライトの頭の上をさらに越えていった。
グランドにはフェンスがないため(ソフトボールが同時に2試合
行えるグランドで試合をしているから)、ボールはライトの後方
でワンバウンドした後、さらに勢いよく転がつていき、もう一方の
試合会場のところに行つてしまつた。

「ホームラン！」

主審が右手をぐるぐると回した。

竜次はゆっくりと走りながらホームインした。

ランナーがいなかつたため1点しか入らなかつたが、ベンチは大
盛り上がりだつた。

「ナイスホームラン！」

次打者の三鷹が声をかけてきた。

「おう。続けよ。」

「よし、任せとけて。」

三鷹は気合を入れながら打席に向かっていった。

「田野君すこーい！」

ベンチに戻ってきた竜次に立川が声をかけてきた。

「どうも。出来ればこれを満塁の場面で打ちたかったよ。」

「めんなさいね。田野君までまわせなくて。」

「あ、そういう意味で言つたんじゃないんだ。気にしないで。」

「うん。」

竜次と立川は軽く言葉を交わすとすぐに三鷹の応援に取り掛かった。

三鷹はセンター前にヒットを打ったものの後続が倒れて、結局竜次のソロホームランによる1点が入っただけで、ゲームセットとなつた。

試合が終わると両チームの選手達はまたあいさつのために整列した。

「この試合は8対3をもつて、部品検査部チームの勝ちとなります。礼！」

主審をしていた人が言つた。

「ありがとうございました！」

両チームの選手達があいさつをして、握手をし、お互いの健闘をたたえた。

試合が終わった後、竜次と立川は一緒に会話をしていた。

「あーあ、終わっちゃったね。」

「私があの少しきつちりと投げていれば。」

「そんなことないよ。僕がピッチャーをやつていたらもっと打たれていったかもしれないし。」

「そう?それより1回戦で敗退しちゃったけれど、田野君はこの後

どうするの？」

「三鷹が近くにあるバッティングセンターに行きたがっているから、一緒に行こうかなと思っているんだけれど。立川さんは？」

「私はこの後の第2試合で墨審をやってくれないかって呼ばれたんだけれど。」

「そうなんだ。審判の人数は足りてる？」

「うん。足りているわよ。」

「じゃあ、僕はこの後荷物をまとめて三鷹と一緒にバッティングセンターに行くから、立川さんは審判がんばってね。」

「じゃあ、また月曜日に会社で会いましょうね。」

「OK。」

会話が終わると立川は次の試合会場へと向かっていった。

一方竜次はベンチに戻つて自分の荷物整理を始めた。

竜次は荷物整理を終えるとグランドに隣接する駐車場まで来た。車のところには彼の上司である高尾部長が待つていた。
彼は試合では7番キャッチャーをしていた。

「日野君。ちょっといいかね？」

高尾部長は竜次を見つけると待つっていたかのように声をかけてきた。

「君はなかなかソフトボールうまいじゃないか。」

「あ、どうも。中学まで野球部だったもんで。」

竜次は手を後頭部に当てながら答えた。

「そうか。それで、君は野球は好きかね？」

「はい。週末にはよくバッティングセンターに行きます。」

「それで一つ聞きたいことがあるのだが？」

「何ですか？」

高尾部長は少し間を置いて本題に入った。

「君は野球のクラブチームに入る気はないか？私の知り合いがそのクラブに所属しているのだが。」

「クラブチームですか？」

「そうだ。君ならどうかと思つて聞いたのだが、興味はあるかね？」

「そうですね…。僕は今野球を個人的な楽しみでやつてているので、クラブチーム所属までは興味ないですけれど。」

「そうか。せつかく実力があるのにな。」

「まあいいですけどね。こうやって楽しんで野球やソフトボールをする機会があれば僕としては満足ですよ。」

「分かった。」

竜次は野球のクラブチームへの誘いをあつさりと断つてしまつた。「それじゃ、僕は三鷹とこの後バッティングセンターに行く予定なんで、お先に失礼します。」

「おお、気をつけてな。」

高尾部長はそう言つて手を振つた。

竜次も手を振つて応えると、少し先の場所にある三鷹の車のところに歩いていった。

車では三鷹が先に運転席に乗り込んでいた。

「待つた？」

「うん、1時間ぐらい。」

「何でだよ！」

竜次は三鷹の冗談にツッコミを入れながら車に乗り込んだ。

三鷹は竜次が助手席に乗つてシートベルトを締めたことを確認すると車を発車させた。

その様子を高尾部長は少し離れたところから見つめていた。

(野球のクラブチームには興味なしか。それに「中学まで野球部だった」ということは、高校に入つて以降は部活として野球をしていないということなんだな。野球好きなのに、何だかもつたいない気もするが…。)

確かに竜次は中学で野球部を辞めており、高校生になつてから今日までの間、野球に関して目立つた活動をしたことはなかつた。

その理由は、彼が中学2年生の終わりから3年生の時にかけて起

きた出来事にあつた。

中学生編1… 中学2年の野球少年

中央中学2年生の竜次は軟式野球部の部活と勉強に精力的に取り組む少年だった。

勉強はクラスの中で飛び抜けているわけではなかつたが、それでも理科と数学で高得点を取つていた。

部活では毎日精力的に練習に取り組んでいた。

夏の大会で3年生が部活を引退してから、その年の間に彼が練習試合に出場したのはこれまでに4回だった。

内訳は代打で3回出場した後に、一度だけ7番レフトでスタメン出場したというものだった。

彼は3年生引退後、最初の練習試合の時に代打で初出場した。

打った打球はボテボテのショートゴロだったが、それがセーフティーバントのような形になり、結果的に内野安打で出塁した。

別の試合で次にバッターボックスに立つた時には3塁線へのセーフティーバントで出塁した。

しかし、さらに別の試合で代打出場した時にはピッチャーゴロに倒れた。

7番レフトでスタメン出場した時には、必要以上に緊張したせいか、1打席目は三振に倒れた。

2打席目もサードフライに倒れた後、神領監督は打撃に見切りをつけたのか、それとも守備能力が低いことに着目したのか、竜次に対して交代を命じた。

それ以降、竜次は出番がないまま12月を迎えてしまった。

彼が所属している野球部では12月はじめから翌年2月途中まで对外試合がないため、部員はみんな体力づくりに励むことになつた。

2年生18人と1年生22人の部員達はランニングや腕立て伏せ、スクワット、腹筋、背筋などのトレーニングに励み続けた。

やがて2月を迎える、最後の週の日曜日に待望の練習試合が組まれた。

その最初の試合で、中央中学は6回まで終了した時点で、0対1でリードを許していた。

そして最終回である7回裏、先頭バッターがフォアボールで出塁した。

神領監督は腕組みをしながらこの後の作戦について考えた後、「よし。」と言つて立ち上がった。

そしてそれまで懸命に声を出し続けていた竜次のところに歩み寄つてきた。

「日野、代打だ。行け。」

「はい！」

竜次は思わずそこで突然出番が回ってきたため、一瞬驚いたが、監督の期待に応えるべく、気合を入れて答えた。

彼は練習でいつも使っている愛用の金属バットを手に取り、素振りを始めた。

一方、神領監督は次の打者のところで代打として登場する予定だった大桑おおくわに声をかけ、そして審判に選手交代を命じた。

代打の代打といった形の交代に納得出来ないのか、大桑は監督のところにやってきた。

「監督、どうして交代なんですか？」

「ピッチャーが右だからここは左バッターをぶつけてみたかってどういうわけだ。分かつてくれ。」

「はい。」

大桑は今日が練習試合ということで気持ちに踏ん切りもついたのだろう、納得したような表情でベンチに戻り、今左バッターボックスに向かおうとしている竜次に声をかけた。

「日野かつとばせよ！」

竜次はその声が聞こえていたものの、無反応のまま神領監督を見た。

監督は竜次と1塁ランナーに向かってサインを送った。
竜次はそのサインの意味を読み取った。

(1球目は待て。2球目に送りバント。分かりました。)

サインの確認が終わつた後、竜次は審判にお辞儀をしながら「お願いします。」と言つて打席に立つた。

そしてバントの仕草を始めた。

「しつかり送れー！」

「チャンスメイクをしてくれ、田野！－」

最終回といふこともあるのだろう、ベンチからはいつにも増して大きな声が飛んだ。

(よおし、やつてやるぞ。)

竜次はますます意気込んだ。

ピッチャ―が構えると、サードは前に進み始めた。明らかにバントを警戒しているようだ。

ピッチャ―が投球動作に入るとますますサードは前進してきた。1塁ベースにいたファーストも前進してきた。

しかし、待てのサインが出ていたため、竜次はピッチャ―がボールを投げるとバットを引いた。

判定はストライクだったが相手の裏をかくことが出来たため、ひとまず作戦はうまくいった。

問題は次だ。次で送りバントを成功させなければ。

竜次は大きく深呼吸をしてまたバントの仕草をした。

しかし2球目をファールにしてしまい、これで2ストライクになつてしまつた。

(まずいな…。)

彼は心に動揺を抱えながらベンチの監督を見た。サインはやはり送りバントだつた。

今度失敗したらアウトだ。失敗は許されない。竜次はますます意気込んだ。

彼は今度はバントの構えをせずに、打つ素振りを見せた。

これは竜次の独断で、ストライクが来たらさつとバントに切り替え、ボールなら見逃すつもりだった。

その後3球目、4球目はボールになり、カウントは2・2になつた。

そして5球目。今度はストライクコースにボールが来た。竜次はさつとバットを出し、バントを試みた。

「コンツ！」

ボールは3塁方向に転がつた。サードはバント無警戒だつたため、急いで前に出てきた。

送りバント成功か？一瞬そんな期待が起こつた。しかしまもなくボールは3塁線を切れ、ファールゾーンに転がつていつた。

「あつ…。」

打球の行方を気にしながら1塁へ走つていた竜次は走るのを止め、ボールを見つめた。

「スリー・バント失敗！バッターアウト！」

審判が右手を上げて叫んだ。

竜次は置いていったバットを拾い上げ、ベンチの神領監督のところに駆け寄つた。

「すみません…。」

「もういい。お前はベンチで声を出せ。」

「はい！」

監督との短いやり取りの後、竜次はベンチに戻つた。

送りバントを決められなかつたこと、監督の期待に応えられなかつたこと、そして少ない出番をものに出来なかつたこと。

そんな悔しさを胸に抱えながら彼は他の部員と一緒に次のバッターに向かつて声を出した。

試合はその後2人がアウトになり、0対1のまま終了した。

試合終了のあいさつをした後、神領監督は部員達を集めてミーティングを行つた。

「今日は今年に入つて最初の試合だつたこともあるが、全体的に打てなさ過ぎだ！ヒットは出んわ、ランナーは送れんわ。これでは勝てんぞお前ら！」

監督は声を荒げて言った。

「はいっ！」

部員達は大きな声で答えた。

「とにかく、この後は打撃練習だ！1年生のレギュラー以外は今から守備につけ！1年のレギュラーと2年は順番に打つていけ！順番が来るまでの間はひたすら素振りをしろ！いいな！」

「はいっ！」

部員達は大きな声で返事をすると、監督に言われたとおりに各自の持ち場に散つていった。

その日の部活は、約1時間以上打撃練習が続いた後に終了した。

日は西に大きく傾いていた。

竜次が自転車で家に到着した時には、空は暗くなつていた。

翌日、部活は朝7時からいつもどおりに始まった。

部員達は全員一緒にグランド3周のランニング行つた後、キャッチボールを始めた。

竜次の相手はいつもどおり大桑だった。

「日野、それじゃいくぞ。」

「おう。」

2人は声をかけるといつものように走つていった。そして竜次は1塁ベースの近く、大桑は2塁ベースの近くに立つた。

「それじゃ、はじめ！」

神領監督の大きな掛け声がかかると40人の部員達は一斉にキャッチボールを開始した。

部員達は相手の胸をめがけてボールを投げ続けた。

ボールを後ろにそらしてしまつた場合は走つて取りにいかなければならなかつた。

また、エラーをしたところを監督に見られてしまうと金属バットでお尻をビシッと1発叩かれる罰が待っているため、みんな真剣だつた。

その5分後、今度は遠投をする時間になつた。

部員達は大体40～50メートルの距離をとつてまたキャッチボールを開始した。

「フライいくぞ、日野！」

大桑が大きな声を出した。

「おう！」

竜次が返した。

それを聞いて大桑は大きくボールを投げ上げた。バッターがフライを打ち上げた時を想定したものだ。

竜次は数歩動いてボールが落ちてくるのを待ち、捕球をした。

「ゴロいくぞ、大桑！」

今度は竜次が大きな声を出した。

「おう！」

大桑が返した。

竜次はバッターが外野へゴロのヒットを打つた時を想定しながらボールを投げた。

それを見て大桑は前に走り出し、ゴロを捕球した。そして外野からのバックホームを想定して素早く竜次に投げ返してきた。このようにフライやゴロ、ライナーの打球やバックホームなどを想定しながら2人はキャッチボールを続けた。

遠投が始まつてから5分が経過すると、今度は監督からクイックの号令がかかつた。

部員達は再び1塁ベース～2塁ベース間の距離をとつた。

「それじゃ、はじめ！」

監督からの号令がかかると部員達は、相手が自分めがけて投げてきたボールを取つて素早く相手に投げ返す動作を繰り返した。竜次と大桑を含めた部員達はこれを2分間休まずに続けた。

クイックが終わると部員達が神領監督のもとに一斉に集まった。

監督はこれからノックを行うから2年生部員全員と1年生のベンチ入り部員達に各自の守備に着くように命じた。

それを聞いて彼らは9つのポジションに散らばっていった。

一つのポジションに2～4人の部員がついた。

ベンチ入りしていない1年生部員達はホームベース付近でボールを打つ監督にボールを渡したり、バットで素振りをしたりしていた。竜次はノックではいつもセンターのポジションについていた。彼がセンターを選んだ理由は、守備で一番たくさん走るため、体力をつけるのにちょうどいいと考えたからだった。

監督はまずピッチャーめがけてボールを打つて取らせ、それをキヤツチャーに返球させた。

続いてサーード、ショート、セカンド、ファースト、レフトの順にノックを行った。

そしていよいよ竜次のいるセンターの順番になった。

センターには4人が守つており、竜次は3番目にボールを受けることになっていた。

「次、センター行くぞ！」

監督が叫んだ。

「オイ！」

センターの1人目が大きな声で叫んだ。

彼は監督が打つた右中間よりの大きなフライを走つて追つていき、フライを取つた。

そしてキヤツチャーめがけて思い切りボールを投げ返した。

続いて2人目が同様にノックを受けた後、いよいよ竜次の番になつた。

「次、いくぞ！」

「オイ！」

竜次が声を出した。

「声が小さいぞ……もう一度……」

監督は怒鳴るようにして叫んだ。

「オイ……」

竜次はさつきよりも大きな声を出した。

そして左中間に上がった大きなフライめがけて走り出した。

当たりは大きかったが竜次は何とか追いつき、ボールを取った。
そしてキャッチャーのいる方向を向いて大きく振りかぶり、思い切りボールを投げた。

その時、彼の右肩にズキッと痛みが走った。

（うつ？ 何だ、この痛みは？）

竜次は顔をしかめた。

（以前も運動で足やひじが痛くなつたことはあつたけれど、今度は肩か。それにもいきなり痛くなるなんて……。）

そう思いながら彼はセンターの定位置に走つて戻つていった。
次の出番が来るまでの間、竜次は右手をぐるぐる回しながら右肩の様子をさぐつた。

回すたびに肩こりのよつな、そんな弱い痛みがはしつた。
（まいつたな。たいしたことじやなさそうだけれど、これまでの足やひじのように早く静まってくれないかな？ これ。）

竜次は右肩を少し気にしながらも、その日の朝の練習を最後まで行つた。

…しかしこの時に起きた痛みが、これから竜次をどんどん苦しめていくことになつていくことを、彼はまだ知らなかつた。

中学生編2… 体育の授業にて

3月も中旬に差し掛かり、もつすぐ春休みになるある日、男子は体育でソフトボールをやる機会があった。

日野竜次はソフトボールが出来ることを心待ちにしていた。少し前まではサッカー やハンドボールをやっていたが、彼はそれらが苦手で目立った活躍も出来ずにいたからだ。

特にハンドボールでは最初から決められていたかのように、ゴールキーパーをやらされ、ショートを体で受け止めるたびに痛い目にあつていたため、早く違う種目に切り替わってほしいと思っていた。これはサッカーをやっていた時も同じだった。

給食が終わって5時間目の体育の時間になる前に、生徒達はAチームとBチームに分かれ、打順や守備位置について話し合つた。Bチームのまとめ役をやることになった野球部の上松はメンバーを集めて打順と守備位置について聞いてまわつた。

「打順は何番がいい?」

「おれ、4番ね。」

「守備は?」

「キャッチャー やりせて。」

「OK。」

このような会話の中で各自の打順と守備位置が決められていった。同じBチームに入った竜次は3番目にまわってきた。

「日野は野球部だし、左打ちだから打順はもちろん1番ね。」

「分かった。で、ポジションはファーストをやりたいんだけど。」

「ファースト? お前外野手だろ?」

上松は首をかしげながら言った。野球部のノックではセンターを守っているのだからそう言つのも無理はないだろ?。

「そうだけれど、今回はファーストにしようと思つて。」

「だめだ。このメンバーの中でフライ取るのを安心して任せられる

のは日野しかいないんだからさ。だからお前はセンターだ！」

「…分かった。」

（一番センターツて試合中に最もたくさん走ることになるから、大変だな。ま、無理をしない程度にがんばろうつと。）

竜次はそう思いながら気持ちを切り替え、ソフトボールに備えた。彼がファーストを希望したのにはちょっととした理由があった。右肩の具合だ。

特にたいした痛みがあるわけではないが、違和感があつたので無理をしたくないと思っていた。

しかしこのことは誰にも話していなかつた。

5時間目が始まり、いよいよソフトボールが始まった。Aチームは1塁側、Bチームは3塁側だつた。

A、Bチームのメンバーは全員で試合開始のあいさつをした。そして両チームのキャプテンが出てきてじやんけんで先攻と後攻を決めた。

Bチームキャプテンの上松はじやんけんに負け、相手が先攻を選んだため、上松や竜次達はまず守備につくことになった。

上松はピッチャーの位置に立ち、投球練習を開始した。

彼は野球部ではファーストのレギュラーだつたが、体育のソフトボールでは自分からピッチャーをやることになつた。

一方の竜次はセンターの位置に立ち、外野手の3人でキャッチボールを始めた。

1回表のAチームの攻撃は0点に終わり、1回裏のBチームの攻撃になつた。

先頭バッターの竜次はセンターのポジションから走つてベンチに戻ると、急いでバットを手に取り、素振りを始めた。

何回か素振りをした後、彼は左バッター・ボックスに立つた。

「ピッチャー、こいつは野球部だから気をつけろよ。」

「おう。」

相手のAチームのキャッチャーが忠告をした。

相手ピッチャーも軟式野球部員で、当然竜次が野球部に所属していることを知っていたため、体育の授業とはいえ、真剣勝負の場になつた。

(さあ、思いつきりかつとばすぞー！)

竜次は真剣な気持ちでバットを構えた。初球から積極的に打つつもりだ。

「日野！まずは壘^{くじかど}に出ろ！」

2番バッターの倉本が声を出した。

「チャンスでおれにまわせ！」

3番バッターの上松がゲキを飛ばした。

竜次は当初の思惑通り、初球を思い切り打つていった。

打球は1、2壘間を抜け、ライト前に転がつていった。

打球が速かつたため、ライトはボールを取ると何と1壘に投げてきた。

やばい。ライトゴロでアウトになるのか。

竜次をはじめ、Bチームのメンバーは一瞬そう思った。
だが送球が山なりだったため、幸いにも竜次が1壘を駆け抜けるのが早かつた。

一瞬ヒヤッとしたがそれでもヒットでノーアウト1壘になつた。

「倉本、続けよー！」

1壘ベース上で竜次は2番バッターの倉本に声をかけた。

「おう。まかせろ。」

彼も声をかけた。彼は野球部ではなくサッカー部だが、左打ちで、足の速さは誰もが認める存在だったため、2番レフトで起用された(彼は左投げ)。

「続けよ！チャンスでおれにまわせ！」

次のバッターである上松も声をかけた。

「おう！一発がますぜ。」

倉本も声をかけた。

しかし、彼はボテボテのピッチャーゴロを打つてしまい、1塁でアウトになつた。が、竜次は2塁に進んだため、とりあえずチャンスは作つた。

「上松、タイムリー頼むぜ。」

2塁ベース上で竜次が言つた。

「おう、まかしとけ。」

上松はバットをビュンビュン回しながら言い、右打席に立つた。相手チームも当然彼が野球部で、しかもレギュラークラスであることを知つてゐるため、外野はどんどん後ろに下がつていつた。

上松は初球を見逃した後、2球目を思い切り打ち、左中間に大きなヒットを放つた。

「ナイスバッティーナー！」

竜次は走りながら声をかけた。そしてゆうゆうとホームインした。

記録は2塁打となつた。

Bチームはこの1点を含め、合計3点を入れて1回裏の攻撃を終了した。

竜次の次の打席は2回裏、1アウトランナーなしでまわつてきた。この時点で試合はAチームが2回表に追い上げきたため、3対2となつていた。

竜次がバッター、ボックスに向かうとキャッチャーは立ち上がりつて指示を出した。

「セカンドはもつと1塁寄りに、ショートはセカンドベースの近くまで移動。外野はもつとライト寄りに！」

「おう。」

「OK。」

彼は相手が左バッターであることと、先程の打席で打球が右方向に転がつていつたことを踏まえて、守備位置を移動させた。（動かしてきたな。でもサークルとショートの間ががら空きじゃん。

「 いっちょ狙つてやるか。」

竜次はバットを振りながらそう考えた。

1球目。相手ピッチャ―は先程アウトになつた9番バッターよりもかなり速いスピードでボールを投げつけてきた。

判定はストライクだつた。ピッチャ―はさつきヒットを打たれたことと、相手が野球部であることをかなり意識しているようだつた。

「 日野！ また塁に出ろ！」

「 かつとばせよ！」

ベンチからは盛んに声が飛んだ。

2球目。今度はかなり遅いボールが来た。判定はボールだつた。

（ 今度はこれで来たか。相手も考えているな。）

相手は揺さぶり作戦に出てきていた。

（ 次にどんなボールが来るのだろう。）

竜次はあれこれ考えながらバットを構えた。

3球目。今度は普通のスピードボールが来た。

（ よし。打つ！）

竜次は打ちにいく決心をすると、左足を後ろに引いてバットを振つた。

カキーン。

打球はサードの横に転がつた。

当たり自体は決して速くはなかつたが、サードは一瞬打球が来たことに驚いたのかビクッとしたために反応が遅れ、ボールを取れなかつた。

どうやら自分のところにはボールが来ないと予想していたらしい。一方のショートはかなり2塁ベース寄りに守つていたためにボールを取れず、打球はレフト前に転がつていつた。

もしショートが定位位置にいたらボールを取つていた可能性が高かつたが、結局シフトを取つたことが逆効果になつた形だつた。

「 大成功――！」

竜次は1塁ベース上で右手を上げ、してやつたりの表情で叫んだ。

「ナイス流し打ちーー！いいぞ！」

上松が声をかけた。

彼は竜次が左足を後ろに下げる打つたところをしつかりと見ていたため、意図的に守備の裏をついてレフト方向に流し打ちしようとしていたことを見抜いていた。

2番バッターの倉本が打席に立つと、上松は送りバントのサインを出した。

（頼むぞ、クラ。）

（OK。）

倉本はうなずくと左バッター・ボックスに立った。

そして1球目できっちりと送りバントを決め、2アウト2塁になつた。

「ナイスバント、クラ。」

「おう。一発頼むぞ、マツ。」

バントを成功させた倉本は上松とハイタッチを交わしてベンチに戻つていった。

「タイムリー頼むぞ。」

「いや、ホームランだ！」

ベンチからはひときわ大きな声が飛んだ。

相手チームの外野手は全員後ろに下がつていった。

上松はホームランを狙つているかのように意氣込みながら右打席に立つた。

「タイムリーーー！」

2塁ベース上で竜次も声をかけた。

1球目。相手ピッチャーは予想通り速いボールを投げてきた。野球部だから当然だろう。

上松はゆうゆうと見逃した。判定はボールだった。

2球目。上松は全力でバットを振つた。

しかし当たりはボテボテのサーブゴロだった。ボールは1塁に送られ、3アウトになつた。

「だ―――か、くつりを始め―――」

1塁を駆け抜けた後、上松は大げさなまでに悔しがつた。野球部のプライドを見せたかったのに期待に応えられず、アウトになつてしまつたのだから、その気持ちは竜次にも分かつた。

「ブ――ツ！」

「ベンチからは上松めがけてブーイングが飛んだ。
やめろよお前ら！」

上松は苦笑いをしながら

結局2回裏は0点で終わつた。

試合は3回表にAチームが1点を入れ、3対3になつた。

まま4回裏になつた。

「の時間が迫ってきていたため 話合はこの回で締めはなること

しかし野球が上手でない8、9番バッターはあえなくアウトになり、2アウトランナーなしで竜次の3回目の打席がまわってきた。

「ホームラン打つて来い！」

竜次はホームランを期待するメンバーの声援を受けながら打席に立つた。

相手チームの野手は下手にシフトを取れば逆を突いてくることを見抜いていたのだろう。キヤツチャーが指示を出すこともなかつたし、全員が定位置に立っていた。

一方の竜次も自分がアウトになれば試合終了になつてしまふので駆け引きなどは無視してとにかく墨に出ることだけを考えていた。1球目。特に速くもなく、遅くもないボールが来た。判定はボールだつた。

相手ピッチャーも小細工なしで勝負しに来ているようだった。

(よおし。それならこいつちも思い切りバットを振るまでだ。)

竜次は次のボールを打つていくことを決めた。

2球目。ど真ん中にボールが来た。竜次は思い切りバットを振りぬいた。

力キーン！

打球はピッチャーチャーの脇を抜け、勢い良くセンター前に転がつた。これで2アウト1塁になった。

シングルヒットばかりだが、これで3打席連続でヒットを打ち、野球部としての面目を保った。

しかも3本のヒットをライト前、レフト前、センター前に打ち分けるという、ある意味珍しい記録もついた。

彼は1塁ベース上でまたも右手を上に上げようとした。

しかしその時、また肩に弱い痛みを感じた。そのためすぐに手を下ろした。

(うつ…。ここでも来たか…。)

彼が1塁ベース上でそう思つてると、打席には2番の倉本が立つた。

「絶対におれにまわせーーー！」

次打者の上松は大きな声をかけた。明らかに自分のバットで決めるつもりだ。

「外野、もつと前！内野も前！特にファーストとサードはもつと前に来い。」

相手のキャッチャーが指示を出した。

内野は前進守備、外野はもつと極端な前進守備を取つた。

相手は倉本をアウトにし、上松との勝負を回避しようとしているのが見て取れた。

倉本はサッカー部。上松は野球部なのだから当然だらう。

そんな中で倉本は1球目を見逃してストライク。2球目ボールの後、2球ファールで粘つた。

(打ち取られてたまるか。何としても塁に出て上松につないでやる。)

)

打席に立ちながら倉本の目は燃えていた。

そして5球目。彼は思い切りバットを振りぬいた。

力キーン！

大きな打球音を立てて打球は右中間に飛んでいった。

飛んでいったと言つてもそれほど勢いがあるわけでもなく、どちらかと言えば打ち上げたと言つた方がいい打球だつた。

しかし前進守備を取つていたため、センターとライトは懸命に走

つたものの、打球はセンターのやや後方にポトリと落ちた。

打つと同時にスタートを切つていた竜次はすでに2塁をまわり、3塁に向かつていた。

「回れ回れーーー！」

3塁ベンチにいるメンバーは大声で叫んだ。何人かは腕をグルグル回していた。ホームに行けというサインだつた。

竜次はそれを見ると3塁も回り、ホームに全力疾走をした。

ホームに走りながら竜次はボールの行方を追つた。するとセンターからボールを受け取つたセカンドがすでにバックホームをしようとする姿が目に入った。

(これはきわどいな。)

竜次はそう考えると頭から滑り込む決心をした。

前方ではキャッチャーがホームインを阻止しようとホームベースを隠すような位置に立つて捕球体制に入つていた。

竜次はホームベース手前まで来ると頭から飛び込むようにジャンプをし、両手を伸ばした。

そして着地すると同時に伸ばした左手がホームベースにタッチした。次の瞬間、地面にたたきつけられた竜次の体はゴロゴロと転がつていった。

「セーフ！」

審判が叫んだ。キャッチャーは竜次にタッチ出来なかつた。

これで4対3となり、Bチームのサヨナラ勝ちになつた。

「イエー——イ——！」

「やつたやつた！」

3塁ベンチは大喜びだつた。決勝打を放つた倉本も
「ナイスラン、日野！」

と大声で叫びながら1塁ベース上でガツツポーズをしていた。
(…何で危険を冒してホームに突入したんだよ。おれがサヨナラ打
を打つてヒーローになりたかったのに。)

次に打席に立つはずだった上松は一応喜んではいたものの、自分
に打席がまわつてこなかつたため複雑な気持ちになつた。

そう思いながらホームインした竜次を見た。彼は倒れたまままだ
起き上がつてこなかつた。

「おい、大丈夫か？」

上松は心配になつて声をかけ、歩み寄つてきた。ホームインした
時に体が地面にたたきつけられたのだから無理もないだろう。

「大丈夫、大丈夫。」

竜次は左手で右肩を押さえながら言つた。

「本当か？」

「ああ、大丈夫大丈夫。」

竜次は上松に対してそう答えると右肩を押さえたまま起き上がつ
た。

「肩、痛いのか？」

「ちょっとね。肩から地面に落ちていったから。」

「そうか。」

竜次は左手で押さえるのをやめて立ち上がつた。そして上松と両
手でハイタッチをしようとした。

しかしその時、右肩に痛みが走つた。

今度は違和感ではなく、本物の痛みだつた。また肩ほどではない
が右ひじにも痛みが走つた。

どうやらひじも体の下敷きになつてしまつたらしい。

「うつ……」

竜次が一瞬痛そうな表情を見せたことで、上松も心配になつた。
「やっぱり打ち所が悪かつたんじやないのか？」

「大丈夫だつて。」

竜次は言い返した。しかし痛みは続いていた。
「どうした？ ホーム突入だけがでもしたのか？」

倉本が駆け寄つて声をかけてきた。

「大丈夫だつて。こんなのすぐにおさまるよ。」

竜次は強がるようにして返した。

試合終了後、両チームの選手達は整列してあいさつをした。そしてチャイムが鳴り、5時間目の体育の授業が終わつた。

授業が終わつた後も上松や倉本は竜次を気遣つていたが、彼の元気そうな表情を見てひとまず安心し、何事もなかつたかのように引き上げていつた。

しかしその後制服に着替え、6時間目の授業が始まつてからも右肩と右ひじの痛みは続いていた。

竜次はそれが気になつていたが、それを他の人に見せようとはしなかつた。

その日の授業が終わり、午後の部活になつた時には右肩と右ひじの痛みはひき、肩の違和感だけが多少残る程度になつていた。

そのこともあつて、彼は何食わぬ顔で午後の部活に出た。

この時、彼はこんな痛みはきっとすぐになくなると考えていた。これまでに右ひじやひざが痛くなつた時も結局そうだつたという前例があつたためだ。

中学生編3… 医師から受けた宣告

3月も下旬になり、中央中学校はいよいよ春休みを迎えることになった。

在校生達は午前中に終業式を終えた後、午後から一斉に部活を行うことになっていた。

野球部は明日から練習試合が3試合組まれており、その後には春の大会も控えていた。

そのため、部員達はみんな試合に出ようとした意気込んでいた。

この日は給食がなかつたため、生徒達は各自で持参したお弁当を食べた。

給食が終わると野球部員達はみんな練習着に着替え、グラウンドに集合した。

そしていつもどおりにグラウンドを3周し、キャッチボールを始めた。

日野竜次のキャッチボールの相手はいつもどおり大桑だった。
「それじゃ今日は僕が1塁ベース側、日野の方が2塁ベース側でいい?」

「OK。」

竜次は了解すると、みんなと一緒に3塁ベースから2塁ベースを結んだ線の延長上に立ち、一斉にキャッチボールを開始した。

5分経つと今度は遠投の練習をし、またさらに5分経つと今度は2分間のクイックを開始した。

しかしその間、大桑はどうも竜次の表情に異変を感じていた。
どうも痛いのを我慢しているように見えたし、遠投をしている時のボールの飛距離も何だか短かったからだ。

キャッチボールが終わると全員が神領監督の前に集合し、今日の練習メニューを確認した。

「それでは今日はこれからいつもどおりにノックを行う。その後は

守備をつけた上でピッチャーを3人並べて立たせ、3人ずつバッティング練習を行うことにする。」

「はい！」

部員達は監督からの指示を聞くと大声で返事をし、各自の守備に散らばつていった。

その途中、大桑は走りながら竜次を呼んだ。

「日野、ちょっといい？」

「何？」

竜次は走りながら返事をした。

「お前、どこか悪いのか？何かキヤツチボールの時、様子がおかしかっただぞ。」

「そんなことないって。」

「口ではそう言つても、お前の表情見れば分かるよ。右肩かどっかも痛めたか？」

「まあ、その…。」

「とにかく無理するなよ。」

「おう。」

短い会話をした後、竜次はセンター、大桑はレフトの守備についていった。

ノックではいつもどおり、監督が打ったボールを取つてキヤツチヤーに投げ返す練習をした。

まず内野手がノックを受け、しばらくするとレフト、センターの順番にまわってきた。

そしていよいよ竜次の出番になつた。

「次、いくぞ！」

「オイ！」

竜次が大きな声を出した。

監督が打つた打球はセンターの定位置よりやや後方に飛んできた。

竜次はフライを取ると振りかぶり、キヤツチャーメがけてボール

を投げた。

同時に右肩と右ひじにまた痛みが走った。

ボールはピッチャーのマウンドの手前でバウンドし、合計3回バウンドしてキャッチャーのミットに収まった。

「何だその送球は！しつかりキャッチャーまで届かせろ！」

一見弱々しい返球に、監督は大きな声でどなつた。

「すみません。」

竜次は帽子を取つてお辞儀をした。

やがてライトまでノックを終えると監督は部員達を全員集め、次の指示を出した。

「それではバッティング練習を開始する。おれの指示通りに3人ずつ順番に打席に入つて打つていけ。ノックを受けた残りのメンバーは守備につけ。いいな！」

「はい！」

部員達は全員で声を出した。

「声が小さいぞ！そんなんで大会に勝てるか！もっと腹の底から声を出せ！…」

「はい！！」

部員達は精一杯大きな声を出した。

「よし。それから日野はちょっとここに残れ。それ以外は各自の配置につけ！いいな！」

「はい！…」

部員達はさつきと同じくらい大きな声を出し、配置についていった。

だが、監督に呼び止められた竜次は一人この場に残つた。

監督は全員が配置についてバッティング練習が始まつたことを確認すると、竜次に声をかけてきた。

「日野。おれがお前をここに呼んだ理由が分かるか？」

「さっきのノックのときに送球が弱かつたことですか？」

「そうだ。お前肩でも痛めたのか？」

「日野。おれがお前をここに呼んだ理由が分かるか？」

「えつ？」

全てを見抜いていたかのよつた監督の発言に竜次は驚いた。

「やっぱり痛めているんだろうな。ちょっと確かめる。」

監督はそう言つと、右肩にマッサージをしてきた。

「くつ…。」

痛みを感じた竜次は思わず顔をゆがめて声を出した。

「なるほど。やっぱり痛めているな。」

「監督、分かつていたんですか？」

「当たり前だ。だてに野球部の顧問をしているわけじゃない。部員をただ鍛えるだけではなく、こういったことにも注意を払わねばな。竜次は痛みを隠しているつもりだったが、監督には全てお見通しだつた。

「お前、今日の練習を終えたら病院に行つて、医者に見てもうつて来い。」

監督は厳しい表情をしながらも竜次に対し気遣いを見せてくれた。

「でも明日から練習試合ですし、これくらいの痛みだつたら投げられないわけではないですけれど。」

「だめだ！」

練習試合に何とか出たいと思つてゐる竜次に対し、監督は首を横に振つた。

「けがをしている奴に無理をさせるわけにはいかん。今日の練習が終わつたら必ず医者に行け。明日診察結果をおれに報告しろ。いいな。」

「はい。分かりました。」

竜次は監督の説得を受け入れ、そう答えた。

その後、彼は他の部員と一緒にバッティング練習や守備練習などをこなした。

練習は午後3時半頃に終わった。

部員達はみんな制服に着替え、家路についていった。

竜次が部室を出ると、外ではクラスメートの上松が待っていた。

「日野、ここの後どうする？ 何人かでバッティングセンターにでも行くか？」

どうやら彼は明日の練習試合や春の大会に備えてさらに練習をするつもりらしい。

「ごめん。監督からの指示でこれから医者に見てもらう」とになつたんだ。」

「医者？」

上松は顔をしかめながら言った。

竜次はその日監督に言われたことを打ち明けた。

「そうか。分かった。じゃあ、大桑か誰かを誘うことにするわ。」

「悪いな、行けなくて。」

「気にするな。それよりも体を大事にしろよ。」

上松はそう言つと、他の部員達に声をかけ始めた。

竜次は軽く手を振ると、走つて自転車置き場に向かつていった。

竜次の向かつた整形外科病院は中学校から自転車で約20分くらいのところにあつた。

彼は常に携帯していた保険証を受付に出し、紙に必要事項を記入した後、待合室で順番を待つた。

そして「日野竜次さん、どうぞ。」という女性看護師さんの声を聞くと、診察室に入つていつた。

この時、竜次はどうせ湿布薬か何かをもう少しひどいと考えていた。

しかしX線検査などの結果を見て、初狩医師は深刻そうな表情を浮かべた。

「日野君、君の右肩の筋肉ははつきりと炎症を起こしています。さらに右ひじの軟骨にも多少異常が見られます。そして右腕の筋肉も炎症を起こしつつあります。」

「

「えつ……？」

医師からの思わぬ宣告に、竜次は動搖してしまった。しかし初狩医師は言葉を続けてきた。

「明らかにこれまで無理な運動をしてきたようですね。このまま続けていたら野球の出来ない体になりますよ。」

「そうなんですか？野球の出来ない体になんてそんな……？」

竜次は初狩医師が悪い冗談を言つているかのような言い方をした。「君にはそう思えるかもしませんが、過去に無理に運動をして大きな故障につながった人を見つきました。ですから、しばらくの間運動を控えてください。」

「控えるって、どれくらいですか？明日から練習試合なんですけれど。」

「出場するのはやめなさい。私から言わせていただくと、今日から3週間はボールを投げるようなことをしないでください。」「……3……週間……？」

全く予期していなかつた宣告に竜次は言葉を失つた。

「日野君、大丈夫ですか？」

「……はい……。」

竜次は明らかに大丈夫そうには見えない言い方で返事をした。

「とにかく3週間は部活を休むよう」。いいですか？」「

「……あの、本当に休まなければならぬんでしょうか……？」

「もちろんです。今日は湿布薬と塗り薬を1週間分出すことにします。それから明日からリハビリを開始することにします。」「……はい……。」「……はい……。」

「まだ現実が受け入れられないようですがれど、私は君のことを思つて言つているんですよ。」

初狩医師は竜次に気を使ひながら語つた。

「分かりました。」

「では、明日からリハビリをしてこきますので、来られる日にはなるべく毎日来るよつにしてください。今日は以上です。」

「はい。」

竜次は何とか返事をして席を立つた。

彼は待合室で待つ間も医師が言つた言葉をなかなか受け入れられなかつた。

（まさか3週間もボールが投げられないなんて…。そんなに待つていたら春休みをまるまる棒に振つてしまつ。練習試合にも春の大会にも出られなくなる。そして明日からいきなりリハビリだなんて…。）

確かに痛みはあつた。しかし投げられないほどの痛みではなかつたので、大したこととは思つていなかつた。

彼としては明日からの練習試合に出場し、監督にアピールをしていくつもりでいた。

しかし突然こんな宣告を受けるなんて…。

竜次は診察代を払つた後も、病院を出て自転車で家に向かつている間も、家に着いた後も、心の中の動搖はおさまらなかつた。

3週間ボールが投げられない…。

その現実とどう向き合つていけばいいのか、心の整理がつかないまま時間だけが流れていつた。

中学生編4… 治療の日々

整形外科病院に行つて初狩医師に見てもらつた翌日、竜次は重い気持ちのまま学校に向かつた。

彼は制服のままグランドに姿を現した。

「日野、お前どうしたんだ？」

上松や大桑をはじめ、部員達は竜次を見るなり口々に質問をしてきた。

「実は昨日病院に行って…。」

竜次は同じ答えを何度も彼らに言つた。

「そうか、大変だな。」

「早く治せよ。」

部員達は一囃三打の姿でグランドに駆け出していく。

しばらくすると校舎から神領監督が出てきた。

竜次はそれを見て真っ先に監督のもとに向かい、診察結果を正直に話した。

「そういうわけで、僕は今日から部活には参加出来なくなりました。すみません。」

「そうか。やつぱり痛めていたんだな。まあ悔しいだろ？ が、しばらくの間練習からは外れてもらつ。お前はひたすら声を出せ。」

「はい。」

竜次はそう言つと、部活とりハビリをビのよつて立てすればいいのかについて話し合つた。

その結果、部活の練習の時にはランニングやボール拾いをなど、右手を使わずに出来ることにだけ参加し、それ以外は声を出すことになつた。

そして途中で部活を抜け出して、診察終了時刻に間に合つようと病院に行くことになつた。

練習試合のある日には試合前の練習の時だけ姿を見せ、部員達が自転車で試合会場に向かうことになると一人で病院に向かうことになった。

春の大会当日は竜次の希望で、試合には出場しないもののユーフォーム姿になつてみんなと一緒に応援をし、試合が終わつたらすぐ病院に行くことになつた。

その日の朝の練習が終わると、全員練習試合が行われる隣の中学校に向かうことになった。

自転車で学校に来た部員達はみんな自転車に乗り、自転車で来なかつた3人の部員は監督の車に乗り込んでいった。
しかしこの後病院に行くことになつている竜次はみんなとは別行動をすることになった。

（早くこのけがを治して、みんなと一緒にことが出来るようにしたいなあ…。）

彼はそう考えながら部員達が学校を出て行くのを眺めた。
少しすると監督が運転している車が竜次のそばに来た。

監督は彼を見つけると車の窓を開けた。

「それじゃ、気をつけて病院に行つてこいよ。」「はい。」

短い会話が交わされた後、監督は再び車の窓を閉め、校門を出ていった。

一人になつた竜次は自分だけ置いていかれたような気持ちになつたが、何とか気持ちを切り替え、病院の方向へとこぎだしていった。

病院では電気治療とマッサージが行われることになつていた。

「それでは日野さん。今から電気治療を行いますので、上着を脱いでまず右肩を出してください。」「はい。」

竜次は女性看護師の岡谷さんに言われたとおりにした。岡谷さん

は導線のついたパッドを2つ出して右肩に当たた。

「それでは今からスイッチを入れます。電流が強いようでしたらお知らせください。」

「はい、分かりました。」

竜次が了解すると、岡谷さんはボタンを押し、電流を流し始めた。右肩にはビリッという感電した時のようなしびれが走った。

「うつ…。」

生まれて初めて体験する電気治療に、竜次はビクッと反応した。「強かつたですか？」

「ちょっと。でも慣れれば平氣だと思います。」

「では、少し下げて様子を見ますね。」

岡谷さんはさつとダイヤルを左に回し、電流値を下してくれた。

「これくらいでよろしいですか？」

「はい。お願ひします。」

「それではこのままの状態でしばらくお待ちください。右肩のリハビリが終わったら今度は右ひじのリハビリに入りますね。」

「分かりました。」

竜次の返事を聞いて、岡谷さんは別の患者さんのところに行つた。彼女はそれからまもなく、また次の患者さんのところに行つた。次から次へと患者さん達の面倒を見ていく岡谷さんの姿を見て、竜次は

(この職業つて結構大変なんだな。)

と思わずにはいられなかつた。

数分後、右肩の電気治療が終わると竜次は岡谷さんを呼んだ。彼女はパッドを今度は右ひじに当て、再び電流を流し始めた。電気治療が終わると今度はマッサージを行つた。

そのマッサージも終わると岡谷さんは肩とひじ、そして腕に塗り薬をぬつて、最後に湿布薬を貼つてくれた。

「それでは今日のリハビリはこれで終了です。お疲れ様でした。」

「ありがとうございます。明日も今日くらいの時間にまた来ます。」「分かりました。お待ちしています。」

「それじゃ、失礼します。」

竜次は簡単に会話を交わすと病院の受付のところに歩いていった。そして名前を呼ばれるとき療費を払って病院を出た。家に帰る途中、彼は薬局に立ち寄り、テーピングとサポーターを買つた。

とにかく治療に関してやれるだけのことをやり、何とか元気な体になつて野球部の練習に復帰したいと考えていた。

それからまもなく野球部は春の大会を迎えた。けがの治療をしている最中の竜次は当然のことながら背番号をもうつことが出来なかつた。

しかし、練習が出来なくとも試合ではユニフォーム姿になり、背番号をもらえなかつた他の部員達と共に、ベンチの後方から一生懸命声を出した。

竜次は試合を見ながら6番ファーストで先発出場しているクラスメートの上松に特に注目していた。

授業のソフトボールの時には自分が打率が高くて、結構頼ら
れている存在だ。

しかし野球部である以上、目標はあくまでも大会にレギュラーで出場することだ。

故障のために出られるチャンスを失つた自分と、胸を張つて大会に出場している上松。

竜次にはそんな彼の姿がまぶしく映つた。

大会は2回戦で敗退し、春の目標は終わつた。これから野球部は夏の大会に向けて活動していくことになつた。

それからまもなく4月を迎える竜次は3年生になつた。

もうすぐ始業式を控えたある日、この日も学校では部活が行われ

ていた。

竜次は朝、右肩、右ひじ、右腕に貼っていた湿布薬を新しいものに貼り替え、ひじと腕にサポーターをつけて家を出た。

学校に着くといつもどおり練習着に着替え、グランンドに姿を現した。

彼は病院に行くようになつて以降、最初に行われるグランド3周のランニングには参加していたが、その後のキャッチボールやノックには参加せず、ひたすら声を出していた。

声を出しながら竜次は練習に参加出来ない悔しさと闘っていた。

（早く練習に出たい。）

彼はいつも心の中でそう考えていた。

この日もノックが終わると神領監督は部員達を集め、この後はいつもどおり3人ずつバッティング練習をすることを伝えた。

部員達は大きな声で「はい！」と詰つと、各自の持ち場に散つていった。

しかし、いつもならバッケネット近辺でボール拾いをしている竜次は一旦そこには向かおうとした後、監督のところに戻ってきた。

「あの、監督。」

「何だ？」

監督は腕組みをしながら聞き返した。

「今日からはバッティング練習の時、守備につきたいんですけど。

」

「お前、肩とひじ痛めているのに出来るのか？」

監督は厳しげな顔をしながら言つた。

「あの、投げるのは他の人にお願いすることにして、せめて守備でボールを取ることだけはしたいんです。」

竜次は自分の思いを素直に打ち明けた。

「そうか。まあそれはおれではなくお前が決めることだからな。そうしたいんだつたら行ってこい。その代わり無理だけはするな。いいか。」

監督はあっさりとOKを出した。

「はい！」

竜次は大きく返事をした。そしてレフトとセンターの間の位置に走つていった。

その位置にはキャッチボールでパートナーだった大桑がいた。彼は竜次が守備につくと

「日野？お前投げられるようになったのか？」

と、首をかしげながら聞いてきた。

「投げるのはまだ。今日はただボールを取るだけなんだ。これくらいなら出来ると思って。」

「どうか。で、取つたらどうするんだ？」

「内野に近い距離なら左手でボールを転がして返す。でも外野の深いところからだつたら大桑に投げるのお願いしてもいい？」

「分かつた。」

竜次と大桑は短く会話を交わしたあと、並んで立つた。

それからまもなくバッティング練習が始まった。

竜次は外野に飛んできたフライやゴロを左手にはめたグローブで取つた。

そして先程言つたとおりのやり方でボールを返していった。

彼にバッティングをする機会は与えられなかつたが、病院に行つてから出来ずにいたことが一つ出来るようになつたため、それだけでうれしかつた。

学校はまもなく新学期を迎えた。

上松とは別のクラスになつたため、2人はクラスメートではなくなつた。その代わりにキャッチボールのパートナーである大桑とクラスメートになつた。

今度の担任の先生は大久保おおくはという女の先生だつた。数学が専門で、部活での顧問は卓球部だつた。

竜次にとつて、女の先生が担任になるのは小学校4年生の時以来

だつたため、何だか新鮮味を感じた。

それから数日後のある日、大久保先生は数学の授業で習つたばかりの公式を黒板に書き、その横に問題を書いた。

「それではこの問題に自信のある人はいますか？」

先生は生徒達を見渡した。すると竜次が自分を見ているのが目に入つた。

「田野君。自信ありそうですね。前に来て解いてもらえますか？」

先生は迷うことなく声をかけた。

竜次も心の中で（自分に来い。）とアピールしていたため、当然でもらえたことはうれしかつた。

「はい。分かりました。」

彼はそう返事をして席を立つと、黒板のところまで歩いていった。そしてチョークを手に取り、問題を解き始めた。

その時、先生がふと

「何だか湿布薬のにおいがするような気がしますけれど、気のせいでしょうか？」

と言つてきた。

それを聞いて竜次は驚いたように先生の方を見た。

「あ、すみません。臭いました？」

「湿布薬しているのは田野君なんですか？」

「はい。ちょっと野球部の練習で肩とひじを痛めたので。」

「そうなんですか。けがには気をつけてくださいね。」

「はい。」

「それはそうと、問題を解く手が止まっていますね。」

「あ、すみません。」

竜次はそう言つと再び右手を動かし、最後まで解いていった。

「はい。良く出来ましたね。」

先生はにっこりと微笑みながら言つた。

「ありがとうございます。」

竜次は一礼をすると席に戻つていった。

先生は黒板の空きスペースを使って次の問題を書き始めた。
その間、竜次は自分の右肩と右ひじをじっと見つめていた。

（うーん。自分では気がつかなかつたけれど、他の人には臭うのか。制服を上に着ているとはいえ、結構べたべたに貼つているから無理もないか。いずれにしても早く治さないとな。薬代もかさむし…。）
このように、彼は授業中に何度も自分のけがのことを考えていた。

やがて初狩医師から言われた3週間が過ぎた。
かつかり

その頃には治療のかいもあって痛みはかなりひいていた。
ある金曜日の授業後、竜次はリハビリを受けにまた病院に行つた。
いつもどおり電気治療とマッサージを受けた後、彼は初狩医師の診断を受けた。

「日野君。あれから3週間が過ぎたが、だいぶ良くなつてきているね。まだ完治というわけではないが、この調子で行けば少しずつ運動を再開してもいいでしょう。」

待ちに待つた初狩医師の言葉を聞いて竜次は思わずうれしさがこみ上げた。

「本当ですか？」

「はい。ただし、決して無理をしてはいけませんよ。少しずつ慣らしていくように。いいですか？」

「はい、分かりました。」

竜次は大きめにお辞儀をしながら言った。

ちよつと声が大きかつたのだろう、まわりにいた人達がこちらをジロツと見た。

「あ、すみません。」

竜次は小声で言つと、今度は恥ずかしそうにお辞儀をした。

何はともあれ、これで少しずつではあるけれどボールが投げられるようになった。

この時、彼の心は喜びで満ちあふれていた。

しかし、本当の苦しみはこれから始まるところと彼はまだ知らなかつた。

中学生編5… 痛みとの闘い

5月のある日。この日は午後から練習試合が行われていた。

試合は6回表終了時点で、中央中学校が5対1でリードしていた。
(中学校の試合なので7回が最終回になります。)

6回裏の攻撃を迎えた時、神領監督は点差がついていることを考慮して、これまであまり出番のなかつた部員に出番を与えることにした。

この回はまず大桑が代打で出場した。

彼も竜次と同様に出番になかなか恵まれずにいた部員の一人だった。

右打席に立ちながら大桑は積極的にバットを振つていった。しかし初球をファールした後2球目を空振りした。

相手キヤツチャーはその振りを見て、試合慣れしていないことを直感した。

そしてピッチャーに今度は高めのボール球を振らせようとした。ピッチャーは首を縦に振つてうなづくと、大きく振りかぶり、要求どおり高めにスロー・ボールを投げてきた。

あつ…！

速球を投げるとばかり思つていた大桑は意表をつかれ、よろけるようにして空振りをしてしまつた。

「ストライーケーク！！バッターアウト！」

審判は大きな声で三振のコールをした。

あつさり相手の術中にかかつてしまつた大桑は呆然と立ち尽くしたあと、重い足取りでベンチに戻つてきた。

「すみませんでした…。」

彼は悔しそうな口調で監督にあやまつた。

「ご苦労。」

監督は表情一つ変えずに一言だけ言った。

大桑はベンチに戻つていつた。

それと同時に監督は審判のところに歩み寄っていき

「代打、日野。」

「田跡　バ　ござれ

「かつとばせ——————！—

ベンチからは大きな声援が飛んだ。

あらかじめ代打を告げられていた竜次はウェイティングサークル
ベンチ前四番、三打席二四番の一。

「お願いします。」

彼は審判にそう告げるとヘルメットをかぶり、打席に立つた。

（この仕事に詰合せで、仕事にこなせない
せめて打つ方でアピールしなければ…。）

章次の心は七羽詠でした。これを逃したのも「チャーン」はないと思つていた。

二〇

相手ピッチャ―は竜次のただならぬ表情を見てニヤツとした。

魔術のよつたやうじつでもしてゐるのだね。

「キャラッチャー、このバッター焦っているぞ。どう攻める?」

「うたなあ最初は入口にホーリーでダイミングを外せよ」

「今度は速球だ。そうすればバッターは狙い球を定めることができ

すに混乱するはずだ。」

「なにしも」
たかが二分

ピッチャリーは首を縦に振つて構えた。

竜次は相手の術中にまんまとはまり、あつという間に2ストライ

八月三十日

3球目こそ誘い球として投げてきた高めのボールを見逃したも

の、4球目をあえなく空振りしてしまった。

「ストライカーーク！！バッターアウト！」

審判は大きな声でまた三振のコールをした。

バットに当てることも出来ずに三振してしまった竜次は悔しさを噛みしめながら戻ってきた。

「監督。期待に応えられずにすみませんでした。」

「『苦労。ベンチに下がれ。』

「…はい。」

監督が言い放った一言に対し、竜次は悔しさを押し殺すようにしてベンチに戻った。

同時に監督はベンチを立つて審判のところに行き、次のバッターにも代打を告げた。

ベンチで竜次は必死に悔しさと闘っていた。

（結局打てなかつた。監督の期待に応えられなかつた。これが恐らく最後のチャンスになるはずだったのに、打てる雰囲気すら作れなかつた。ちくしょう…。）

そう考えていると、突然ベンチで右となりにいた大桑にグローブでひざをバシッとたたかれた。

「何やつてんだ。声出せよ。」

親友であり、厳しいことを言つような性格でないはずの彼にいきなりきつい言葉をかけられ、竜次は我に返つた。

「ああ。悪い。」

竜次は小声でそう答えた。

（そうだ。悔しいのは自分だけじゃない。大桑も悔しいんだ。）

そう思つと今打席に立つている次のバッターに大きな声をかけた。

竜次がこれを最後のチャンスと考えていたのには理由があつた。彼は連日右肩、右ひじ、右腕の痛みと闘つていた。

3月から4月にかけて病院で懸命にリハビリに取り組み、病院でもらつた湿布薬や塗り薬を使い続けたおかげで痛みは一旦おさまつ

た。

初狩医師からは「決して無理をしないよう」、「こうした条件付きで運動を再開することが許された。

そう告げられた翌日から部活に復帰した。
しかしそれから連日、まるで医師の言葉を無視するかのように全力でボールを投げ、バットを振り続けた。
練習には連日最後まで出続けた。

それ故に部活が終わった時には病院の診察終了時間になってしまった、行くことが出来なかつた。

そんな日々を繰り返すうちに、いつしか行かなくなってしまった。
行かなくなつた後はリハビリを受けたことがなく、病院で塗り薬や湿布薬をもらつこともなかつた。

そして4月下旬、ゴールデンウィークを目前に控える頃に再び痛みが出てくるようになった。

野球部引退まで残り3ヶ月を切つた時期に、病院になんて行つていられないと考えていた竜次は、病院に行こうともせずに練習に明け暮れた。

練習が終わると薬局であらかじめ買っておいた市販の塗り薬や湿布薬を使い、自分で体のケアをしていた。

痛みを感じても人に言おうとせず、我慢を続けていた。

だが彼の気持ちとは裏腹に、痛みは日を追つごとにひどくなつてきた。

最初は表情に出さずに隠していたが、やがてボールを投げた時の飛距離が段々短くなり、表情にも出てくるようになったため、他の部員や監督にも分かつてしまつた。

そのため監督は口には出さないものの、竜次に守備を任せられないと判断していた。

それでも竜次は守備がだめなら打つ方にかけたいと考え、何とか試合に代打で使ってもらえる機会を待つた。

5月になると監督は練習試合で使うメンバーを絞り始めていた。

そのため、控えに甘んじていた部員達はみんな今度の出番が最後になるだろうという危機感を持っていた。

そんな中で竜次は今日やつとチャンスをつかんだにもかかわらず、あえなく三振してしまった。

もう試合には出してもらえないかもしれない。せめて痛みさえなかつたら…。

心の中にはそんな焦りや悔しさがあった。

話を練習試合に戻そう。

竜次の次に代打で出てきたバッターはフルカウントまで粘つたものの最後はサードゴロに倒れてチェンジになった。

そして最終回の7回表。監督は代打で出た3人に代えて別の3人を守備につかせた。

その後2点を失つたものの、試合は5対3で逃げ切り勝ちをした。

試合終了後、監督はいつもどおりミニーテイリングをして、今日の試合の反省点などを部員に伝えた。

それが終わつた後、代打や守備固めで出場した部員達を一人ずつ個別に呼び出してカウンセリングすることになった。

まず最初に大桑が呼ばれた。

少し話し合つた後、彼は竜次のところに駆け寄ってきた。

「日野。次はお前だぞ。」

「おう。それから大桑。監督からなんて言われた?」

何を言われるのか不安だつた竜次は思わず聞き返した。

「別に。もつと落ち着いてバットを振れだつて。それより早く行けよ。」

「分かつた。」

竜次はそう言つと走つて監督のところに向かつた。

「監督。」

「日野、今日は残念だつたな。」

監督はいつもどおりの厳しい表情で言つた。

「はい。すみません。」

竜次は帽子を取つて頭を下げた。

「あやまるのは別にいい。それよりお前、バットを振る時の動きが変だつたぞ。やはり肩とひじをかなり痛めているんじゃないのか？」

監督は今日の結果よりも竜次の体を気にしているようだった。

「そんなことないです。まだまだバットを振れます。」

「隠さんでいい。遠投だけでなくバットの振りにも影響が出るようではこれから試合に使えんぞ。」

「はい…。」

全てお見通しの監督に痛いところを突かれ、竜次は言葉に詰まつた。

「それでな、おれから一つ提案があるのだが、いいか？」

「何ですか？」

「お前、ランナー「一チをやつてみないか？」

監督の口からは意外な言葉が飛び出した。

「ランナー「一チですか？」

「そうだ。今「一チをやつているのは2人だけだが、彼らが試合に出場すると「一チをやる奴がいなくなるからな。そこでお前に頼もうかと思つてな。」

「…。」

竜次はすぐに返事が出来なかつた。「一チをやらせてくれると言われば響きはいいのだが、裏を返せば「お前は選手としては戦力外だ。」と言つていてるようになつたからだ。

「とにかく今度の練習試合の時に、3塁「一チに挑戦してみる。出来ないと呟つのなら他の奴に声をかける。」

監督はさう言い放つた。その言葉を聞いて竜次は迷いが吹つ切れた。

「やります。やらせてください。」

竜次は頭を下げる願いをした。

「分かった。精一杯やってみる。では次の奴を呼んでいい。」

監督は表情一つ変えることなく言った。

「はい！」

竜次は大きく返事をすると全力で走り出した。（ランナー「一チか。今まではただ見ているだけだったけれど、僕に出来るかどうか。でもそんなことは言つていられない。コーチでも何でもやるしかないんだ！）

次の部員に向かつて走りながら、彼はそう考えていた。

その後、6月になつてからも竜次は他の部員達と同様に部活に出続けた。

みんなと同じ練習メニューをこなし、ノックの時にはセンターの守備にもついた。

部活が終わると水道の水で右ひじや右腕を冷やし、せりにはハンカチに水を含ませて右肩に当てて冷やした。

ぬらした部分はタオルで拭いた後、部室で塗り薬をぬり、湿布薬を貼つた。

とにかく自分の体をケアするために出来ることは何でもやつていた。

しかしそれだけやつても部活に参加すると、たつた1球遠投をしただけでもう痛みが出るようになつてきた。

この頃になると右肩、右ひじ、右腕に加えて右手首にまで痛みを感じるようになっていた。

とにかく部活に参加している間は連日痛みと闘い続けていた。その影響はやがて授業中にも及んでいた。

部活引退まであと1ヶ月に迫つたある日、朝の練習を終えた後、1時間目の数学の時だつた。

担任の大久保先生は黒板に問題を書いて

「それではこの問題を解ける人、前に出てきてください。」

と言いながら生徒達を見渡した。

「はい。」

竜次は左手を上げて言った。

「それでは日野君。前に出てきてください。」

先生に言われて彼は黒板のところまで来た。

そして右手で白チョークを手に取ると、その手を黒板の方に伸ばした。

その時、肩とひじに痛みが走った。

「くつ……。」

竜次は顔をゆがめ、左手で右ひじを押さえた。

「日野君。どうしましたか？まさか部活で痛めたのですか？」

大久保先生は心配そうに問いかけてきた。

「大丈夫です。」

竜次は強がるよつにして答えた。そして痛いのを我慢しながら計算式を書いていった。

いかにも辛そうな表情で問題を解いている彼を、先生は心配そうに見つめていた。

「それでは先生、これでいいですか？」

「正解です。それでは日野君。席に戻ってください。」

そう言わると竜次は自分の席に戻つていった。

先生がその問題の解説をしている間、竜次は痛みのことばかり考えていた。

その日の授業後のことだつた。

ホームルームが終わると大久保先生は竜次の席のところに来た。

「日野君。ちょっとここで話をしたいと思つていますが、大丈夫ですか？」

「はい。いいですけど。」

竜次は一瞬何を言われるのだろうかと不安に思いながら言った。

先生は卓球部の女子生徒に今日は少し遅れることを告げると、他

の生徒達が教室を出て行くのを待つた。

やがて2人だけになると、大久保先生は聞きたかったことを話し始めた。

「日野君、昼休みに野球部の神領先生から聞いたんですが、肩とひじをかなり痛めているんですか？」

先生は険しい表情をしていた。

「…はい。」

竜次は少しうつむきながら答えた。

「どのくらい痛いのか私に状況を話してくれませんか？」

「…分かりました。」

先生に促されて、竜次は右肩、右ひじ、さらには右腕と右手首までも痛めていることを話し始めた。

さらに自分なりのやり方で治療をしてること、部活ではボールを投げた途端に痛みが生じること、部活の間ずっと痛みと鬪つ正在直に話した。

その話を聞いて大久保先生の表情がさらに曇った。

「そんな状態で部活なんかやっていたんですか？このままでは大変なことになりますよ。病院に行つた方がいいのではないですか？」

「僕もその方がいいとは思っています。でも最後の夏の大会まであと1ヶ月しかないんで、休みたくないんです。」

「気持ちとしては分かりますが、私としてはお勧めできません。私も卓球部の顧問ですからこれまでにけがをしたり体を痛めたりした人を見てきました。」

「先生もそういう生徒を見てきたんですね？」

「はい。ラケットの振り過ぎで筋肉に炎症を起こし、部活を休んだ人を見てきました。その人がもし大事な大会を棒に振るようなことがあつては、私としても辛いですし、そんな目にあわせてしまった責任を負わなければなりません。そんなことにはなってほしくないんです。」

「…。」

「私が決められたことではないですが、休んでくれますか？神領先生も心の中ではそう思つてゐると思いますが…。」

大久保先生は竜次のことを心配してくれているからこそ、自分の部活動参加を遅らせてまでわざわざこのようなカウンセリングの場面を作つてくれたという気持ちはよく分かつた。

しかし、竜次は自分の気持ちを変えようとはしなかつた。

「それでも、部活に出続けたいんです。」

「痛いのにどうしてですか？」

「確かに痛いですし、病院に行きたいという気持ちはあります。でも野球部で活動出来るのはあと1ヶ月だけなんです。もしここで病院に行つたら間違いないドクターストップをかけられます。そうなつたら引退までただ部活を見ていることしか出来なくなると思ひます。」

竜次はさらに続けた。

「僕は、他の人達が懸命に野球に取り組む中で、自分だけ何も出来ないまま野球部を引退するのだけは嫌なんです。だから痛いのは覚悟の上で、あと1ヶ月最後までやり通したいんです。」

「でもこのままでは高校で部活を続けられなくなりますよ。」

「僕は中学で野球部を辞める覚悟で部活をやつています。だから野球が出来るのは今しかないんです。最後までやりたいんです。」

「。

玉碎覚悟

の言い方をする竜次に圧倒されたのか、大久保先生はしばらく黙り込んでしまった。

「先生、せつかくこの場を作つてくれたのに、こんなことを言つてごめんなさい。」

「いいえ。私は日野君の本心を知りたかったというのが一番の目的でしたから。君がそう言つうのでしたら私はそれ以上は言ひません。でも体だけは本当に氣をつけてくださいね。」

「はい。」

「では私は卓球部の方に行きますから、日野君も早く部活に行きな

さい。」

「分かりました。」

大久保先生は自分の机に置かれている資料を手に取ると、少し急ぐようにして教室から出て行つた。

一方の竜次も教科書やノートを急いでかばんに入れ、部活に向かつていつた。

当然、その日も右肩から右手首にかけて襲いかかってくる痛みに耐えながらボールを投げ続けた。

だがこの痛みはやがて日常生活にも暗い影を及ぼすようになった。

6月下旬のある日曜日のことだつた。

この日は部活が休みだつたため、竜次は家にいた。

部活が休みになる日は月に1日しかないため、貴重な休日だつた。彼はいつものとおり、朝起きると古くなつた湿布薬をばがして、新しい湿布薬を貼つた。

そして肩から手首までの範囲に塗り薬をぬつた。朝食を取つた後、彼は居間でテレビを見ていた。

すると田の前をハエが飛びながら横切つていつた。

「ハエか。よおし。」

竜次は立ち上がるとハエたたきを取りにいつた。

そして右手でハエたたきを持ちながらハエを追つた。

彼が狙いを定めて思い切り振ると、またしても肩とひじに痛みがはしつた。

「くつ…、またかよ。」

竜次は左手でまた右ひじを押さえた。

(ハエたたきを1回振つただけで痛くなるなんて…。こんなことにまで影響が…。)

彼はハエのことも忘れて痛みのことを気にしていた。

痛みによる影響はそれだけではなかつた。

歯磨きをする時にもひじや腕、手首に痛みがはしつた。

そのため、左手で歯磨きをするようなことがあった。

また文字を書き続けている時や消しゴムで字を消した時にも手首に痛みがはしるようになったことがあった。

6月はじめの時点では痛いと言つても部活の最中と終わつた直後だけで、その後は普通に過ごすことが出来た。

しかし今は日常生活にまで影響が出るようになつてしまつた。

そこまで悪化した肩、ひじ、腕、手首のことと、竜次は精神的にもまといつていた。

この痛みを何とかしたい。

ボールを満足に投げることも出来ない。

家で素振りの練習をすることも出来ない。

重いものを持ち上げることも出来ない。

自分の責任とはいえ、こんな体にしてしまつた自分が悔しい。

でも誰にも相談出来ない。

病院に行くことも出来ない。

絶対に部活動を止められる。

これから1ヶ月の間、何も出来ないまま引退の時を待つことになる。

そんなの嫌だ。

そんなことになるべからざつたらせめてあと1ヶ月野球をやらせてほしい。

痛みに襲われたつていい。

これから野球の出来ない体になつたつていい。

2度と野球部に入れなくなつてもいい。

野球部員として活動出来るのは今しかない。

高校で野球部なんて考えていらない。

だからどうしても今野球をやりたい。やらせてほしい。

…でも、痛い。

本当に痛い…。

右肩も、右ひじも、右腕も、右手首も…。
どうかこの痛みを取り除いてほしい…。

誰でもいい。

神様でもいい。

もし今一つだけ願いがかなうのなら、この痛みを取り除いてほしい。

お願いします。神様…。

もう一度好きなだけ野球が出来た昔の状態に戻してください。

神様、仏様、助けて…。

それでも誰にも相談出来ない…。

野球部引退まで、あと1ヶ月…。

中学生編6… 引退まであと少し

7月。3年生の部員にとって部活をすることが出来る最後の月になつた。

最後の夏の大会は7月21日の終業式が終わるとすぐに始まることがになつていた。

レギュラーになることが確実な野球部員達は今までよりも熱心に、しかしけがをしないように部活に取り組んでいた。

その中で竜次は満足に練習も出来ない毎日を過ごしていた。

この時期、竜次は1塁ベースのところに立つてボールを投げても、それが2塁ベースまでノーバウンドでは届かなかつた。

そのため、キャッチボールで遠投とクイックの時には後ろでボール拾いに徹していた1年生部員と交代していた。

またノックの時にはもう守備につかせてもらえなかつた。
無理もないだろう。まともにボールを投げられないのだから。

竜次は練習すら十分に出来ない悔しさと必死に闘いながら部活に出て続けていた。

大会2週間前の土曜日。この日は3年生が全員集合して記念写真を撮ることになつていた。

3年生部員18人は横3列に6人ずつ並んだ。
竜次は最前列の右から2人目の位置になつた。

大桑は最前列の左端に、上松は真ん中の列の真ん中付近に来た。
最前列の部員は座り、真ん中の列の部員は中腰に、最後列の部員と神領監督は立ちながら並んだ。

カメラマンは大会でセカンドを守ることがほぼ確実な2年生部員の^{じゅざき}薙崎が担当することになつた。

薙崎は全員が写真におさまるように一歩ずつ前後に移動した。
そして撮る位置が決まると立ち止まり

「全員笑つてください」

と言つた。

監督を含めた3年生部員全員は各自で笑顔を作った。

「それでは撮ります。ハイ、チーズ。」

華崎はそう言つとボタンを押し、一枚田の写真を撮つた。
写真撮影は合計3回行われた。

撮影が終わると華崎はフィルムカメラを監督に返しにきた。

「監督、どうぞ。」

「い、苦労。」

監督はカメラを受け取るとみんなに向けて

「それでは今日の部活動はこれで終了にする。」

と言つた。

部員達は歩きながら部室へと向かつていった。

竜次は部室の近くにある水道のところへ向かつていき、いつもど
おり水道水で右肩から右手首までを冷やした。

それをしている間、彼の頭の中には色々な思いがめぐつた。

これまで故障のためにさんざん痛い目にあつてきた。

辛い思いもたくさんした。

監督に怒鳴られたこともあつた。

引退してしまえば、それから開放される。

楽になれる。辛い思いをしなくて済むようになる。

でももう2度と野球部に所属は出来なくなる。

大好きな野球というスポーツにさよならをしなければならなくな
る。

今まで野球が一番の生きがいだつたのに、その野球がなくなつたら何を生きがいにすればいいのだろう。

でも、今はそんなことを考えたくない。

まだ野球部に所属しているんだから。

でもあと少しで引退になつてしまつ。

早く楽になりたい。でも引退したくない。

どちらにしても重い現実を背負つ「」になってしまひ。そんな気持ちに襲われていた。

「」の日撮影された写真はその日のうちに現像され、翌日、3年生部員達に1枚ずつ手渡された。

竜次は封筒を開けて写真を一度見た後、すぐに封筒の中に戻してしまった。

自分の姿を見るのが嫌だからだつた。

写真では確かに笑つていた。

でも本当は笑える心境ではなかつた。

心の中では泣いていた。

この笑顔は撮影のために無理やり作ったものだつた。

そんな外見と内面があまりにも食い違つた自分の姿を見ることが嫌だつた。

その写真はその日のうちに部屋の棚の奥に封印した。

翌日の土曜日。「」の日は練習が終わつた後、最後の大会に出場する部員達がつける背番号の発表が行われた。

部員達は円陣を組んで監督の周りに集まつた。

背番号は1から18まであつた。

監督は1番から順番に発表することにした。

「それでは1番から順に番号を発表する。呼ばれたら大きな声で返事をしておれのところに来い。いいな！」

「はい！」

部員達は一斉に声を出した。

「まず背番号1、上野原。」

チームのエースピッチャーである彼は呼ばれると「はい！」と大きな声を出した。

そして監督のところに歩み寄つていった。

「お前にこの背番号を託す。エースとしてがんばれよ。」

監督はそう言つと、上野原に差し出した。

「はい！精一杯がんばります！ありがとうございます！」

上野原はそう言つて背番号を受け取ると、自分のいたところに戻つていった。

続いて2番が発表され、次に3番の発表になつた。

「背番号3、上松。」

「はい！」

上松は呼ばれると、上野原と同じようにして背番号を受け取つた。試合では不動のファーストを守つていたため、彼が選ばれることは容易に想像出来た。

しかしそれでも竜次にとつては実力でレギュラーの背番号を勝ち取ることが出来た彼がまぶしく思えた。

「背番号4、葦崎。」

「はい！」

「2年生だが、お前の実力は高く評価している。がんばれよ。」「はい！全てを出し切るつもりでがんばります！ありがとうございます！」

番号はどんどん進んでいき、いよいよ数字が2桁になつた。
ここからは控え選手だ。試合に先発で出られる可能性は低いが、それでも呼ばれた方がいい。

竜次は何とか自分の名前が呼ばれることを願つていた。
もちろんけがのため、選手としてはもう戦力外になつている」とは知つていた。

それでもランナーコーチとしての望みにかけていた。

監督からこの役割を打診されて以来、彼は3塁ランナーコーチとして5試合、1塁ランナーコーチとして1試合出場した。

先発出場することもあれば、ランナーコーチをしていた人が試合に途中出場する時に交代で出場したこともあった。

その役割を通じて監督にアピールを重ねていた。

竜次はいつ名前を呼ばれてもいいように備えた。

しかしこうしている間にも番号はどんどん進んでいき、14番まで渡し終えた。

残る背番号はあと4つ。もし呼ばれなければランナー・コーチになることさえもかなわないまま野球部を引退しなければならなくなる。

竜次は心の中で祈った。

「次。背番号15…」

監督は次の番号を読み上げた。

まだ名前を呼ばれない部員達は息をのんだ。

「日野。」

監督ははつきりとした口調で竜次の名前を言い切った。ついに自分の名前が呼ばれた。

「はい！」

竜次は大きな声をあげ、監督のところに歩み寄った。

「ランナー・コーチとしての役割頼んだぞ。」

監督はそう言つてくれた。

それは選手としては戦力外であつても、ランナー・コーチとしてなら戦力になると判断してくれたということを意味していた。

「はい！がんばります！ありがとうございます！」

竜次は大きな声で返事をした。

そして15番を受け取ると、自分のいたところに戻った。

どんな形であれ、背番号だけはもらつことが出来たので、竜次は少しばかりほつとしていた。

その後、竜次のキャッチボールのパートナーである大桑は17番をつけることになった。

恐らく代打として使うことを考えて彼を選んだのだろう。

彼も春の大会では背番号をつけられなかつた一人のため、ほつとした様子だった。

それから1週間が経ち、いよいよ3年生にとっては最後となる夏の大会が幕を開けた。

大会に参加する各学校の野球部の生徒達は開会式での行進に参加するために総合運動場に集結した。

竜次の所属する中央中学校の野球部は背番号1を背負つた、エースでキャプテンの上野原を先頭に背番号の順に並んだ。

季節は夏なので、ほとんどの部員達が半そでのアンダーシャツを着ていた。

その中で竜次は長袖を着ていて、右手首にはサポーターをつけていた。

当然暑かった。

しかし彼の右肩、右ひじ、右腕、右手首には湿布薬がべたべたに貼られていて、さらにそれを固定するためにテープニングがグルグルに巻かれていた。

もしそれを何も知らない人に見せたらみんな驚いてしまうだろう。そして「一体どうしたの?」と聞いてくるだろう。

それが嫌で彼は長袖にした。

だが長袖を着ていても右手首の部分だけはどうしても他の人に見えてしまう。

そのため、右手首にサポーターをつけてごまかすこととした。

やがて開会式が始まり、選手入場の時間になつた。

行進が始まると、その途端肩とひじから手首までの一帯に痛みが走つた。

竜次は痛みを必死に我慢しながら懸命に腕を振つた。

(早く腕を休ませたい。そのためには早く終わつてほしい。)
行進している間、彼はそのように考えていた。

中学生編7… 野球部最後の日

中央中学校の初戦は開会式翌日の第2試合だった。この日は朝早く学校に集合して軽く練習を行つた。

竜次はこの日も湿布薬とテーピングをつけていた。

彼がこの日行つた練習は最初のランニングだけで、その後のキャ

ッチボールとノックの時にはボール拾いの役に徹していた。

約1時間の練習が終わると、自転車で総合運動場に向かつた。

部員達は会場に着くと、空きスペースを使って軽く練習をした。

やがて第1試合が終わり、いよいよ中央中学校の試合になつた。みんながグランドに姿を現すと、その脇を第1試合で敗退した中

学校の野球部員達が歩き去つていった。

彼らはハンカチを顔に当てながらみんな泣いていた。

「ちくしょー…。」

「勝てなかつた…。」

そんな声が竜次達の心に突き刺さつた。

(僕達も今日の試合で負けたらこうなつてしまふんだ。何としても勝たなければ。勝つて、1日でも長く野球部員としていられるようにしなければ…。)

それは部員の誰もがそう思つてゐることでもあつた。

全員がグランドにそろうと、監督は背番号をつけてゐる18人を集めミーティングを始めた。

「この大会は負けたら終わりのトーナメント方式だ。みんな目の前の一瞬一瞬に全力を尽くせ。いいな！」

監督は最後の「いいな！」の部分を大声で言つた。

「はい！」

部員達も負けじと大きな声を出して応えた。

「それから、控えのメンバーに言つておく。試合は9人だけで戦う

わけではない。18人で戦うんだ。そのことを忘れるな。いいか！

「はい！」

「それでは今からスターティングメンバーを発表する。呼ばれたら大きな声で返事をしろ。」

「はい！」

監督は手帳にはさんでいた紙を取り出して広げた。

「1番、セカンド　華崎！」

「はい！」

監督はこのようなやり方で一人ずつ名前を読み上げていった。

呼ばれた部員は大きな声で返事をした。

ファーストを守る上松は5番、ピッチャーの上野原は6番に入った。

竜次は名前を呼ばれることはなかつた。

分かつていてこととはいえ、やつぱり名前を呼ばれないのは悔しかつた。

試合は中央中学校が1塁側ベンチになり、後攻になつた。

審判から整列の号令がかかると18人の部員達は「オイ！」といふ掛け声と共に一斉に走り出し、横に並んで整列した。

「それではこれより試合を開始します。一同、礼！」

主審を勤める人が声をかけた。

「お願いします！」

両チームのメンバーは帽子を取つてお辞儀をした。

そして中央中学校のレギュラーは守備についていき、控えのメンバーはベンチに戻つていった。

試合は3回までは両チーム共に点が入らず、0対0のまま進んだ。4回表、この回は1アウトを取つた後にピッチャーの上野原が連續ヒットを浴び、2、3塁となつた。

それまで完璧に近い内容で相手を押さえていただけに、監督はタ

イムを取つてマウンドに向かつた。

「初めてのピンチだが、大丈夫か？」

監督は上野原を気遣つた。

「はい。大丈夫です。」

「そうか。なら、次のバッターには内角のボールくさいコースを突いていけ。もし歩かせて満塁になつてもダブルプレーが取りやすくなる。だから落ち着いて投げろよ。」

監督は他人達には聞こえないように小声で話しかけた。

「はい、分かりました。」

「よし、それではがんばれ。」

監督はベンチに戻つていき、試合が再開された。

「ピッチ、大丈夫大丈夫！」

「押さえられる！」

ベンチからは盛んに大きな声が飛んだ。

その声に後押しされたのか、上野原は次のバッターを簡単に2ストライクに追い込んだ。

次の3球目を高めに外し、次の4球目で勝負をすることになつた。投げるボールは監督からの指示通り、内角へのきわどいボールで決まつた。

上野原はセットポジションで構えると、4球目を全力で投げた。しかし次の瞬間、ボールはバッターの体に当たつてしまつた。デッドボール。これで1アウト満塁になつてしまつた。

「落ち着け落ち着け！まだ点は入つてないぞ！」

監督はベンチから大きな声を出した。

「ピッチ落ち着け！」

「まだ点は入つてない！」

ベンチで竜次達は必死に大きな声を出した。

次のバッターはバットをぶんぶん振り回しながら左打席に立つた。

「内野ダブルプレーに備えろ！」

監督の指示を受けてファーストの上松は定位位置よりも2、3歩前

に来た。

セカンドの蓮崎をはじめ、サードもショートも前進守備をしてきた。

キャッチャーは内野「口」を打たせるために低田を指示した。

上野原は「クツ」とつなづくとセットポジションで構えた。

そして1球目。

ピッチャーガ投球動作に入った直後に3塁ランナーが走り始めた。そしてバッターはバントの構えをした。スクイズだ。すでに投球動作に入っていた上野原はボールを高めに外すことが出来ず、ストライクコースに投げてしまった。

コンツ。

バッターは1塁方向にバントをした。スクイズを警戒していなかつた内野陣は完全に裏をかかれる形になってしまった。

3塁ランナーは悠々とホームインした。バッターは何とか1塁でアウトにしたもの、ついに1点を取られてしまった。

待望の先制点が入つて相手チームの部員達はまるで勝ったかのように喜んでいた。

「まだ1点だ！ここで踏ん張れ！」

中央中学の部員達がみんな悔しがっている中で、監督は表情一つ変えず、落ち着くように促した。

この場面で冷静でいられるのはさすが監督だった。

部員達もそんな監督の姿に後押しをされたのだろう。素早く表情を立て直すと

「まだ1点、まだ1点！」

「2アウト、2アウト！」

と、懸命に声を出した。

しかし、一旦傾いた流れは簡単には変わらないのだろうか、上野原は次のバッターに初球を狙われてセンター前ヒットを打たれた。

これで3塁ランナーと2塁ランナーが返り、この回3点を取られてしまった。

負けたら引退が待つて いる勝負の中での失点は大きかった。

部員達には明らかな悲壮感が漂つた。その中で監督は全員を自分の周りに円陣を組ませた。

「お前ら、まだ試合は続いているんだぞ！元気を出せ！」

監督はいつも増して大きな声で檄げきを飛ばした。監督は何としても勝たせたい。1回戦で敗退させたくないといつも気持ちを誰よりも持っているのだから当然だろ？

「はい！」

「とにかくこの回点を取りに行くぞ！」

「はい！」

「いくぞ！」

「オー！」

18人の部員達は精一杯大きな声を出した。

（何としても点を取ってくれ！）

試合に出られるチャンスのない竜次は必死に心中で願い続けた。

しかし中央中学は反撃をすることが出来ないまま、回だけが進んでいった。

ピッチャーの上野原は5回、6回この相手を0点に押さえたものの、7回表に2アウト満塁から押し出しのフォアボールを投げてしまい、相手にさらに1点が入った。

その後の2アウト満塁のピンチはどうにか三振で切り抜けることが出来た。しかしスコアは0対4。

しかも中央中学に残されたチャンスは7回裏の1イニングだけになつた。

この回に少なくとも4点を取らなければ初戦敗退となつてしまつ。そして3年生部員は同時に野球部引退が決まる状況になつた。

部員の中には泣きそうな表情の人人がいた。

攻撃に入る前に監督はまた部員達を集めて円陣を組ませた。

「残されたイニングはこの回だけだ。だがお前らそんな顔するな。

最後まであきらめるな。精一杯声を出せ。悔いを残すな。いいな！」

「はい！」

部員達はみんな精一杯声を出して監督の檄に応えた。

「それからこの回は代打を使う。呼ばれた奴はここに残れ。」

監督はそう言つと、控えメンバー3人を呼び出した。

その中に竜次は含まれていなかつたが、背番号13で、3塁ランナーコーチの勝川が含まれていた。

勝川は監督の指示を聞いた後、竜次のところに来た。

「日野。おれはこれから代打で出場することになったから、3塁ランナーコーチについてくれ。」

「分かつた。」

「頼むぞ。しつかり役目を果たしてくれよ。」

「OK。」

竜次はそう言つと、3塁ランナーボックスへと走つて向かつていつた。

ボックスに立つと彼はランナーがホームに突入する時をイメージしながら右腕をグルグル回し始め、出番に備えた。

本当は右腕は痛みのためにまともに回すことが出来ないほどの状態であった。

しかし左手では指示が伝わりにくい可能性があるとこつことで、結局右腕で指示を出すことになった。

瀬戸際に追い込まれている中央中学ではあつたが、竜次は3塁コーチとして出場したこの時だけはその状況を忘れ、出られた喜びに浸つていた。

それからもなく相手のリリーフピッチャーが投球練習を終え、代打の勝川が右打席に立つた。

「勝川ー！かつどばせーーーー！」

「思い切り振つていけーーーー！」

ベンチからは今まで以上に大きな声が飛んだ。

1球目。勝川はホームランでも狙っているかのようにバットを思

い切り振り回していった。

「ガキンッ！」

打球はワンバウンドした後、大きく弾み、サードの頭の上を越えていった。

勝川はレフト前ヒットで1塁に出塁した。彼は塁上でガツッポーブをした。

「ナイズバッティー——ン——！」

ベンチから声が上がった。

「いいぞ勝川！」

竜次も大きな声を出した。

次のバッターが代打として打席に立つと、監督は「3球目に盗塁しろ」というサインを出した。

勝川はそのサイン通り、相手ピッチャーが3球目の投球動作に入ると同時に走り出した。

この時点でボールカウントは2ストライクだったため、ヒットtrandランもかけることになっていた。

バッターは少し高めのボールに喰らいつつとしてバットを振つていった。

しかしバットは空を切つてしまつた。これでバッターは三振になつた。

ボールはキャッチャーから2塁に送られた。

勝川は足から滑り込んでいた。

(セーフになつてくれ！)

竜次は心の中で祈つた。

しかし次の瞬間、無常にも「アウトー」という2塁審の声がこだました。

「セーフだろ！？」

セーフだと思った勝川は判定を受け入れることが出来ず、審判にアピールをした。

しかし判定は変わらなかつた。

これで2アウトランナーなし。後がなくなった。

監督は泣きながらベンチに戻つていく勝川を見ながら主審のところに行き、

「代打、大桑。」
と告げた。

背番号17をつけた大桑は悔いを残すまいとバットを思い切り振り回し、右打席に向かつていった。

アウトになればその瞬間試合終了、そして野球部引退。彼はそれまで体験したことのない雰囲気の中で右打席に向かつていった。（こまま終わりたくない。最後の打者になりたくない。）
彼は打席に立ちながらそう自分に言い聞かせていた。

「墨に出てくれ！」

「頼むぞ大桑！」

ベンチからは今まで以上に大きな声援が飛んだ。

「思い切り振つていけ！悔いを残すな！」

3塁コーチボックスから竜次も叫んだ。

相手ピッチャーはキャッチャーからのサインにうなずくと大きく振りかぶつた。

同時に大桑は今まで見せたこともないような形相でバットを構えた。

ピッチャーが第1球を投げた。渾身の力を込めた速球だった。

大桑はそれに応えるかのように思い切りバットを振つていった。

「ガキーン！！」

大きな打球音を立てながら1塁線を転がつていき、ファーストのミットの脇をすり抜けていった。

「フェア！」

1塁墨審が大きな声で叫んだ。

「回れ回れ！」

中央中学の誰もがそう叫んだ。

大桑はその声援を受けて勢い良く1塁を回り、2塁に駆け出して

行つた。

「もつと回れ！」

3塁コーチの竜次は痛みと闘いながら右腕をグルグル回し、今2塁にたどり着こうとしている大桑に伝えた。

大桑はそれを見ると2塁をけり、3塁に向かつて走り出した。

その時、ボールはライトからセカンドに返ってきていた。セカンドはボールを受け取ると、サードに向けて思い切り投げた。

「滑り込め！」

竜次は自分から見て左側の地面を指差しながら叫んだ。

大桑は指示されたとおりに走り、そして滑り込んだ。同時にサードがボールを取り、タッチを試みた。

大桑が3塁にたどり着くのとサードがタッチするのはほとんど同時だった。

「セーフ！！」

竜次は大声を出しながらセーフのジョスチャーをした。

（セーフになつてくれ！）

中央中学の誰もがそう思つた。

3塁墨審は一瞬間を空けた後、判定を下した。

「アウト！」

…その瞬間、竜次や大桑をはじめ、中央中学のメンバー達は時間が止まつた。

同時に相手の中学校のメンバーは大歓声を上げて喜び出した。

その光景を竜次は呆然と見つめていた。

（…終わった…のか…？）

彼は現実がまだ受け入れられず、その場に立ち尽くしていた。

「やつた――――！」

「勝つた勝つた――――！」

守備についていた相手の中学校のメンバー達はマウンドに集まつた。そこにベンチにいたメンバーも加わつた。

彼らは抱き合つようにして初戦を突破した喜びを爆発させた。

その光景を見て龍次はますます悔しさがこみ上げてきた。そして少しづつ田の前で起こつた現実を理解出来るようになつてきた。田の前ではアウトになつた大桑が地面に横たわり、両手で顔を押さえながら泣いていた。

それを見ているうちに、大桑につられるよつにして龍次の目にもだんだん涙が浮かんできた。

「大桑、ごめん…。僕が回れなんて指示を出したから…。」

泣きながら竜次は声をかけた。

「いいよ、そんなの。野球部での最初で最後のヒットを打てたから、悔いはないよ…。」

大桑は立ち上がり、泣きながらそう答えた。

試合終了のあいさつをした時にも、監督が最後のミーティングをするためにメンバーを集めた時にも、グランドを後にしていく時にも涙は流れ続けていた。

こんなに泣いたことはこれまでの人生で経験したことがなかつた。恐らくこれから的人生でも経験することはないとさえ思つた。

グランドを離れて駐輪場に向かう途中、2年生の葦崎が上松と会話をしていた。

「上松先輩、高校に行つてからも野球がんばってください。」

「ああ、がんばるよ。お前もがんばってくれよ。」

「はい！」

会話をしている間も2人はまだ泣いていた。

葦崎はさつき上野原にも同じようなことを話していた。どうやら3年生部員一人1人に言つて回つているようだつた。

彼は上松との会話が終わると、今度は龍次のところに歩み寄つてきた。

「日野先輩、これからも野球を続けるんですか？」

輩崎は竜次の状況を知っているだけに「高校に行ってからも野球がんばつてください。」ではなく、このような言い方をしてきた。
「…前にも言つたけれど、もう野球部には入らない。」

竜次は泣きながら、震える声で応えた。

「本当に野球やめるんですか？」

「ああ。痛くてもうボールが投げられないから…。」

「そんなに痛いんですか？」

「ああ。右肩も、右ひじも、右腕も、右手首も。全部痛い…。この右手ではもう野球を続けることは出来ない。サヨナラだ。野球部だけではなく、野球そのものから…。」

「先輩、そんなに悪化させちゃったんですか？」

「ああ。だから僕から後輩達に一つだけアドバイスをするとしたら、とにかくけがには気をつけてくれ。そして僕みたいなこんな無茶はしないでくれ…。」

「はい…。」

これまでけがらしいけがもせずに野球を続けてきた輩崎にとつては衝撃的なことだったのだろう。彼は圧倒されるような表情で返事をした。

好きな野球が出来なくなってしまう…。

今まで自分が生きがいにしてきたものがなくなってしまう…。
それがどれだけ辛いことなのか、輩崎は理解していなかつた。
しかしそうなってしまった人が目の前にいることで、彼の心にはけがに対する考え方へ変化が現れたようだった。

自転車で家に帰る途中、竜次はふと空を見上げた。

空は大きな入道雲がいくつか出ている以外、カラッと晴れ渡つていた。

彼は自転車を止め、空を見上げた。

本当に野球部が終わってしまったんだなあ。

これでもう痛い思いをしなくてもすむ。

でももう野球に関わっていくことはもうないんだな。

これまで痛くても部活に出続けてきたけれど、果たしてその選択は正しかったのかな？

休めば野球が出来ないまま、背番号ももらえないまま引退の時を待ち続けることになるから今まで痛みをこらえてやってきた。

そのおかげで背番号だけはもうことが出来た。

でも、それと引き換えにこれから野球の可能性を失くしてしまった。

今さら言つてもしようがないけれど、一体、どちらの選択が良かつたのだろう？

多分、結論なんか出ないだろう。ずっとこれからも…。

でもけがをして一つ分かったことがある。

それはもしけがで好きな野球が出来ない体になつたら、野球にしてどんな夢を持っていたとしてもかなわぬ夢になつてしまつうことだ。

厳しい練習に耐えながら栄光を目指す野球だけでなく、趣味や楽しみとしての野球も出来なくなつてしまつ。

そうなることでどれだけの悔しさや後悔を味わいながら過ごすことになるのか…。

どうかそんな取り返しのつかない状況になつてしまふ人が一人でも少なくなつてくれれば…。

竜次はそう考えるとまた自転車をこぎだし、家に向かっていった。彼の野球にかけてきた日々は、ついに終わった…。

社会人編2… 野球好きな青年

前略 中学3年生の自分へ

あの時は本当に悔しい思いをしましたね。

野球部を引退して、これからどうすればいいのかという不安に襲われた時もありましたよね。

野球という生きがいを失い、燃え尽き症候群におちいった日々もありましたね。

野球に関する thing を避けて過ごした日々もありましたよね。

でもいつまでも落ち込んでいても仕方ない。新しい目標を見つけてそれに向かってがんばっていこう。

僕はやがてそう決心し、高校受験という新しい目標に向かってがんばることにしました。

そしてその後、僕は高校に進学し、大学に入り、大学院まで行きました。

今、僕はとある企業のバイオ部門に配属となりました。

朝早く起きるので大変ですが、中学時代の野球部と同様にがんばっています。

会社でソフトボール大会がある時には必ず参加しています。

結構活躍しているので、他の社員から頼られています。

週末には運動と気分転換をかねてよくバッティングセンターに通っています。

結構いい当たりを連発した時には本当にすがすがしい気分になりますし、ピッチング練習でいい結果を残せた時にはうれしくなりますよ。

プロ野球の試合のある日にはよくテレビやラジオで自分の好きなチームを応援しています。

時には野球場に出かけ、応援歌を歌いながら野球観戦を楽しむこともあります。

今、僕は野球というものを心から楽しんでいます。

野球部引退後、野球を嫌がっていた時期もありましたが、今はもう大丈夫です。

どうやらあの辛さも、悔しさも、悲しみも、時の流れが癒してくれたようです。

そして再び野球好きな僕に生まれ変わることが出来ました。

だからあのときの僕。もう心配はしないでください。

そしていつまでも泣いて過ごすようなことはしないでください。

社会人となつた竜次は会社主催のソフトボール大会があつたこの日、車の助手席で過去の自分に向けてメッセージを発していた。試合に敗退した後、竜次は仕事仲間である三鷹とバッティングセンターに行くことになり、その途中でそのような考え方をしていた。車はやがてバッティングセンターに到着した。

今日は日曜日なのでお客様が多く、2人は出番が来るまで準備体操をしながら待つた。

先に左用レーンが空いたので、竜次は貸し出し用の金属バットを手に取り、そのレーンに入つていった。

「日野、がんばれよ。」

「分かった。」

竜次はそう言つとスピードを120km/hに合わせてと高さを調節し、スタートボタンを押した。

最初の2、3球は空振りしてしまつたが、次第に当たりだし、痛烈な当たりを出すようになつた。

その度に後ろでネット越しに見ていた三鷹は

「ナイスバッティング！」

と声をかけた。

竜次はプレイ中「おつ。」と言返答するだけで、打撃に集中した。

彼は最後となる24球目をマシンめがけて打ち返した。

そして投球が終わると、足元に転がっていたボールを拾い上げて遠投を始めた。

「おおっ、飛ぶねえ！」

後ろで見ていた三鷹が声を出した。

竜次はボールを全て投げ終えるとレーンの外に出てきて三鷹の隣に座った。

「田野、さすがだな。バッティングもなかなかうまいし、ボールを結構遠くまで飛ばすじゃないか。」

「そう言われるほどじゃないよ。バッティングも打率に換算したら2割5分くらいだし。まだ低目が苦手だし。それに遠投も多分50メートルもいっていいなと思うけれど。」

「へえ。野球活動していない割には内容にこだわるんだな。」

「それもこれも野球が好きだからね。ところで三鷹は野球のクラブチームに興味はないのか？」

「ないない。そんな実力ないから。おれはプロ野球の応援一筋でいくよ。」

「そうか。三鷹はひとたび応援に行くとすごいからなあ。すっげえ興奮するし、勝つと負けるでは機嫌がずいぶん変わるし。」

「それは言つなつて。」

2人が会話をしていると、右用レーンが一つ空いた。

三鷹は会話を急に止め、急ぐようにしてそこに入つていった。

一方の竜次も左用レーンに人がいないことを確認すると、今のうちにとばかりに入つていった。

バッティングセンターでの打撃練習が終わると2人はピッチングコーナーに歩いていった。

そこは1番から9番までの数字が書かれているのにめがけて15球のボールを投げるという「ストライク9」と、投球の速度を計測する「スピードガンコンテスト」という2つのモードがあった。

ピッチングに興味のない三鷹は参加しようとはせず、後ろから竜次の投げる姿をじっと見ることにした。

竜次は300円を払つてボールを手に入れるとストライク9のボタンを押した。

そしてマウンドに立つとピッチャーのように構え、1球ずつボールを投げていった。

的にボールが当たるとその数字の部分の電気が消えた。

「ナイスコントロール！」

その度に三鷹は後ろから声をかけた。

「サンキュー。」

竜次は一言だけ返すと次のボールを拾い、投げ続けた。的にボールを当てれば当てるほど残りの的は小さくなつていったが、竜次はそれを気にしようとはせず、次々と投げていった。

竜次は15球のボールを全部投げきった。結局射抜いた的は6枚だった。

「日野、やるじゃねえか。6枚も当てるなんて。」

「どうも。でも三鷹、悪いけれどもうーゲームやってもいい？」

「何だよ。まだ投げるのか？」

「ああ。何だかもつと投げたくなつてさ。いいかな？」

「いいけど。でもおれはバッティングのほうをしたいから戻つてもいいか？」

「いいよ。じゃあ、終わつたらそつちに行くな。」

「OK。」

三鷹はそう言つと、バッティングのコーナーに戻つていった。

竜次はまた15球ボールを手に入れるとき度はスピードガンコンテストのボタンを押した。

そして力いっぱいボールを投げた。

最初の1球目は87km/hと計測された。2球目は89km/h。3球目は86km/hだった。

やがて竜次は15球を全部投げ終えた。

最高の球速は93km/h。平均は88km/hだった。

竜次はまたボールを手に入れると、今度は再びストライク9に挑戦した。

結果は5枚抜きだつた。

最高が6枚抜きで時速88km/hなりますだとこいつのが竜次の個人的な感想だつた。

バッティングのコーナーでは三鷹が2ゲーム打つて、その後はベンチにもたれていた。

バッティングセンターでの打撃練習とピッチング練習が終わると、竜次と三鷹の2人は車に乗り込んだ。

三鷹はこれから竜次を家まで送り届けてから帰宅することになつていた。

運転中2人は会話で盛り上がつっていた。

「三鷹はあんまり調子が良くなかったみたいだな。何か空振り多かつたし。」

「今日かなり動いたからね。明日は足が痛い痛いの状態で出社することになると思うけれど。」

「おいおい、無理するなよ。そつ言えればさつときバッティングやつている時にもフォームが崩れていたし。」

「そう。実はもう足が筋肉痛なんだ。」

「早っ！1試合でそれかい？」

「まあね。」

「あんなあ、運動するのもいいけれど、急に運動をし過ぎてけがをするなよ。けがしたら大変なことになるからさ。」

「分かった。気をつけるよ。」

「気をつけろよ。けがは考えている以上に怖いものだからな。」「あいよ。」

三鷹が運転する車はやがて竜次の家の近くまでやつってきた。

「それじゃ、三鷹。」の辺で降ろしてくれる?」

「いいのか?」

「うん。」そこからなら歩いて5分くらいだし、それにあのコンビニに行きたいと思つていたから。」

「そうか。だつたらあのコンビニの駐車場に入るからそこで降りるつて形でいい?」

「いいよ。」

車は信号を右折すると交差点わきにあるコンビニエンスストアの駐車場に入つて止まつた。

竜次は助手席のドアを開けて降りた。

「それじゃ日野。また明日な。」

「うん、また明日。それから三鷹、家に帰つたらちやんと整理体操しておけよ。」

「分かつた。それじゃまた明日。」

竜次はこつくりとうなずくと、ドアを閉めた。

車は勢い良く走り始めて道路に入り、交差点を左折して走り去つていつた。

竜次は車が建物の陰に隠れて見えなつた後、コンビニエンスストアへと入つていつた。

コンビニエンスストアでスポーツドリンクを買つた竜次は家に着いた後、自分の机にプロ野球の選手名鑑が置いてあるのを見つけた。スポーツドリンクを飲みながら彼は名鑑を開き、今年のプロ野球の日程を見た。

そこには対戦カードや試合会場、試合開始時刻がびっしりと書き込まれていた。

自分が応援しているチームを見ていると、彼の脳裏にふとアイデアが浮かんだ。

そうだ。応援しているチームのビジター試合に行ってみようかな?これまでホームの試合ばかりに行つていただけれど、他の球場に

行けば別の視点で野球を見られるかもしない。

今までになかった、野球に関する新しい考え方を学べるかもしれない。

色んなチームのファンの人達と話が出来るかもしない。

相手チームの本拠地で相手チームのファンに囲まれながら自分のチームを応援している人達の気持ちを理解出来るかもしない。

竜次はそう考え、仕事が休みになる期間とプロ野球の日程を照らし合わせた。

応援しているチームがビジターで試合をする日にはその球場まで遠征をしてみることを決心した。

さらには応援しているチームがなくても野球場めぐりで一度その球場に行つてみたいとも考えた。

(やつぱり僕は野球が好きなんだな……。)

野球場めぐりをする予定を立てながら、竜次はそう考えていた。

日野竜次。かつて中学生時代に野球で涙したことのある彼は社会人となつた今、野球好きな一人の青年として過ごしていた。

(おわり)

社会人編2… 野球好きな青年（後書き）

作者より

最後まで読んでいただき、誠にありがとうございます。
この作品は自分の実体験をもとにしながら創作を重ねて仕上げた
ものです。

なお、作中に登場する人物名ならびに中央中学校という名前は実
際のものとは一切関係ありませんのでご了承ください。

作中に登場する登場人物名、中学校名の由来

- ・日野竜次： 僕が過去に発表した作品の主人公「ヒリュウ」と
「星野求次」を組み合わせたもの。
- ・それ以外の登場人物： JR中央線の駅名（日野がJR中央線
の駅名だったのですこうしました。）
- ・中央中学校： これもJR中央線に由来しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2407m/>

Baseball is my life. ~野球が好きで、野球に涙した人~

2010年10月8日14時32分発行